

第 26 回
専門日本語教育学会
研究討論会誌



2024 年 3 月 2 日 (土)
於：立命館大学 大阪いばらきキャンパス

専門日本語教育学会

THE SOCIETY FOR TECHNICAL JAPANESE EDUCATION

第 26 回 専門日本語教育学会研究討論会誌

目次

●口頭発表（1）

1. ビジネス接触場面からみた日本語教育に関するケーススタディー
—日本企業で働く日本人・中国人社員へのインタビュー調査から—
大久保雅子（早稲田大学）…………… 1
2. 日本留学試験読解問題における出現漢字の分析
—非漢字圏進学希望者への支援を目的として—
林希和子（大阪大学）…………… 3
3. 大学初年次のアカデミック・ライティングの要約文指導における「抜き書き」の問題
湯浅千映子（大阪観光大学）…………… 5

●ポスター発表

1. 日本語学習者の動機づけ向上を目的とした読解シリアスゲームの開発と実践
岩本穰志・シン・ジュヒョン・稲葉光行（立命館大学）…………… 7
2. 大学院基礎共通科目における留学生への研究活動支援
—「学術研究の技法 I」での取り組み—
鈴木秀明（目白大学）…………… 9
3. 「高専留学生の実験レポートの書き方」テキストを用いたレポート執筆指導とその効果
山田朱美・加藤学（津山工業高等専門学校）…………… 11
4. ビジネス場面における日本語漢字語彙の受容現象の考察
—在中自動車部品メーカーを例に—
黄寛宇（華南師範大学大学院生）・劉偉（華南師範大学）…………… 13
5. 中国人日本語学習者の依頼メールにおける配慮の表し方
—モデル文からの気づきに注目して—
須賀 和香子（国立国語研究所）…………… 15
6. 日本語ビジネス Eメールの読み手が感じる配慮
—日本で勤務する日本語母語話者と非母語話者のビジネスパーソンへの調査から—
横川未奈（大阪大学大学院言語文化研究科大学院生）…………… 17

7. 自動車整備士養成教科書の基礎的語彙調査 —語数・語種・重要語・コロケーションの観点から— 日暮康晴（筑波大学大学院生）	…………… 19
8. 中国中等教育におけるコロケーションによる語彙教育 —中国語の知識を直接利用できる「名詞＋を＋和語動詞」に着目して— 崔皓（立命館大学大学院言語教育情報研究科大学院生）	…………… 21
9. ベトナム語母語話者における漢越語の意味把握に関する基礎調査 —日本語教育・学習への応用を目指して— 道上史絵（立命館大学）・天野裕子（沖縄大学）・Tran Quoc Hiep（大阪大学大学院 人文学研究科大学院生）・比留間洋一（静岡大学）	…………… 23
10. 大学入学直後の「経済の基礎的専門語」の習得状況 —ベトナム人留学生と韓国人留学生を中心に— 重田美咲（広島市立大学）・中原郷子（長崎外国語大学）・竹中知華子（西日本工業大 学）	…………… 25
11. 理工系大学院における英語プログラムの留学生の日本語学習の位置づけとその意義 —キャリア形成を視野に— 卓妍秀・村岡貴子・福良直子（大阪大学）・和嶋雄一郎（名古屋大学）	…………… 27
12. 大学院オンライン・ゼミナールにおける留学生の質疑者としての参与と適応 烏日哲（国立国語研究所）	…………… 29
13. 日本の大学における短期留学生のための会話教材（中級前半）の開発に向けて —既存の会話教材の分析に基づく提案— 今田恵美・大久保加奈子・川瀬愛・林和子（立命館大学）	…………… 31
14. 縦断学習者コーパスからみた日本語学習者のフィラーの使用傾向 —ストーリーテリングを中心に— 呉楚琦（国立国語研究所）	…………… 33
15. 日本語学習者の論理的な思考をいかに促進させるか —成果発表のポスターに見る学術日本語授業の問題点と改善策— 李羽喆（マカオ大学日本研究センター）・石黒圭（国立国語研究所）	…………… 35
16. パラグラフ・ライティングについての学習課題分析 永井敦（神戸大学）	…………… 37

17. 医療専攻留学生の抱える学習上の困難点 —日本語教育実践及び留学生支援検討の基礎として— 山口真葵（明海大学）	…………… 39
18. 介護用語学習支援のための視聴覚素材ライブラリの開発 布尾勝一郎（立命館アジア太平洋大学）・角南北斗（フリーランス）・奥村匡子（神奈川大学）・齊藤真美（日越大学）・中川健司（横浜国立大学）	…………… 41
19. スポーツ留学生と日本語 ～学生の語りから見えた日本語力獲得の過程とその検証～ 日野純子・東会娟（帝京大学）	…………… 43
20. ピアノのレッスンにおける教授内容と言語表現 —音のメタファーに注目して— 小笠恵美子（昭和音楽大学）	…………… 45
 ●口頭発表（2）	
4. 日本語学習者はどのような語を検索しているのか —語彙検索行動データの語種に着目して— 佐野彩子・吉甜・石黒圭（国立国語研究所）	…………… 47
5. 人文系論文における係助詞「は」の直後に読点が打たれる要因について 岩崎拓也（筑波大学）・井伊菜穂子（国立国語研究所）	…………… 49
6. 小説の読みに見られる登場人物の内面の推測の特徴 ：中国語話者と日本語母語話者との比較 伊藤拓人（一橋大学言語社会研究科大学院生）	…………… 51

ビジネス接触場面からみた日本語教育に関するケース スタディー

—日本企業で働く日本人・中国人社員へのインタビュー調査から—
Japanese Language Education from the Perspective of Business Communication:
Findings from Interviews with Japanese and Chinese Employees of a Japanese Company

大久保 雅子^{※1}
OKUBO, Masako

キーワード：ビジネス日本語、外国人社員、ビジネスコミュニケーション能力
Keywords: business Japanese, non-Japanese employee, business communication skill

1. はじめに

本研究の目的は、日本企業で働く外国人社員、日本人社員を対象としたインタビュー調査により、ビジネス接触場面における外国人社員の日本語使用に関する意識を明らかにし、日本社会で働く外国人のために必要なビジネス日本語教育を検討することである。

厚生労働省の「外国人雇用状況」によると令和 4 年 10 月末の外国人労働者数は 1,822,725 人で、届出が義務化された平成 19 年以降、過去最高を更新したことが報告されている。産業別外国人労働者数の割合をみると、「製造業」が全体の 26.6% (485,128 人) と最も多く、事業所規模別では、「30 人未満」規模の事業所で就労する者が最も多く、外国人労働者数全体の 35.8% (651,644 人) であったことが示されている。このような規模の企業でのビジネス接触場面において、日本人と外国人とのコミュニケーションが多く生じていると考えられる。今後も外国人労働者の増加が見込まれ、ビジネス日本語教育の需要が高まっている。

日本政策金融公庫総合研究所 (2017) では中小企業における外国人雇用の実態をみるため、3,924 社を対象に「外国人材の活用に関するアンケート」を行っている。その中で、外国人従業員の日本語力を「とくに配慮しなくてもコミュニケーションをとれる」と回答した企業が 44.1%、「難しい言葉を使わなければコミュニケーションがとれる」が 39.2%で、「日本語での意思疎通にさほど支障がない人が多い

ようである」と分析されているが、視点を変えてみると、とくに配慮を必要としないとされる 44.1%以外の残り 55.9%については、何らかの配慮が必要であると言える。

近年、ビジネス接触場面に焦点を当てた日本語の問題に関する研究も行われており、栗飯原 (2011) は香港、服部 (2017) は中国・台湾においてインタビュー調査を行っている。日本においても、ビジネス接触場面で日本語を使用したコミュニケーションに関する事例を収集し、日本社会で働いている外国人社員のためのビジネス日本語教育を検討していくことが重要である。

2. 調査

本調査では、ビジネス接触場面における外国人社員の日本語コミュニケーションの問題点を明らかにするために、同じ会社の日本人社員と外国人社員の調査協力者 4 名 (表 1) に一人ずつ半構造インタビューを実施した。なお、対象とした会社は、東京にある中小企業 (製造業) である。

表 1 調査協力者

出身	年齢	役職	在職期間	日本滞在
日本	60 代	管理職	12 年	-
日本	30 代	営業職	1.5 年	-
中国	40 代	管理事務職	3 年	18 年 ^{注1}
中国	30 代	研究職	2 年	15 年 ^{注2}

^{※1} 早稲田大学日本語教育研究センター准教授

3. 結果および考察

インタビューの文字化資料を質的分析したところ、以下の4つが明らかになった。

1) 社内において、日本人社員は中国人社員を共に働く同僚として捉え、中国人社員の日本語の問題を理解し、円滑なコミュニケーションを心がけていた。

2) 管理事務職の中国人社員が社外ビジネスコミュニケーションにおいて使用する日本語が問題視されていた。

3) 日本人社員が認識している中国人社員の抱える日本語の問題点は、中国人社員が自己認識していた日本語の問題点と異なっていた。

4) 日本人社員（管理職）は、中国人社員の日本語力に対して厳しい評価をしており、日本語力の向上を希望していた。

以上により、この企業では社内コミュニケーションにおいては、日本人社員が外国人社員に対して配慮をしながらコミュニケーションを行っていることがわかった。一方、社外ビジネス接触場面においては、高い日本語コミュニケーション能力が必要とされていることが示された。本調査で対象とした外国人社員2名は、日本滞在歴が長く、特に管理事務職の外国人社員は、継続して日本語を使用しながら働いていても、社外ビジネス接触場面では日本語使用に問題があることがわかった。しかしながら、本人はその問題点に気づいておらず、企業側は、外国人社員の日本語によるビジネスコミュニケーション能力に対してどう対処していいのかわからないといった実情が明らかになった。

4. まとめ

本調査結果から、外国人社員の日本語によるビジネスコミュニケーション能力の問題は、外国人社員が日本人社員とともに働きながら人間関係を構築していくことにより、社内的に大きな支障とはならないことが示された。一方、社外ビジネス接触場面においては日本語によるビジネスコミュニケーション能力が問題となっていることが浮き彫りとなった。既に日本で長く働いている外国人社員であっても、日本語によるビジネスコミュニケーション能力の更

なる向上が求められており、このような外国人社員に対して日本語教育がどのように支援していくのかを検討する必要がある。中小企業において日本語教育を独自で提供することは難しいことが予想されるため、外国人社員が日本企業に就職した後も支援が受けられる場の提供を検討することも必要であろう。企業と日本語教育が連携を図ることで、適切なビジネス日本語教育を提供できれば、外国人社員の仕事の幅が広がり、外国人との共生社会の実現に近づくことが期待される。

また、日本人社員と外国人社員の多様なビジネス接触場面における事例を分析し、ビジネス日本語教育のモデルを構築することができれば、将来の日本企業の働き手になる可能性がある日本語学習者に対して、実用性の高いビジネス日本語教育を提供できるはずである。外国人社員を雇用している様々な企業を対象とした事例を収集し、現場で必要となるビジネス日本語教育を検討していくことを今後の課題とする。

(okubom@aoni.waseda.jp)

注

注1 中国の大学で日本語を専攻。来日後、日本の大学院で学び（経営学修士）、日本企業を数社経て、現職。

注2 中国の大学で医学を専攻。日本の大学院で学び（医学博士）、大学の研究員を経て、現職。

参考文献

- 1) 栗飯原志宣：ビジネス接触場面における日本語母語話者の問題意識—使用言語の違いから見る問題意識の共通点と相違点—, 早稲田日本語教育学, 11, pp.109-133 (2011)
- 2) 厚生労働省：「外国人雇用状況」の届出状況まとめ（令和4年10月末現在）」(2023)
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_30367.html
- 3) 日本政策金融公庫総合研究所：中小企業の成長を支える外国人労働者, 同友館 (2017)
- 4) 服部明子：職場の接触場面における日本語使用—中国・台湾のビジネス関係者へのインタビュー調査から—, 三重大学教育学部研究紀要, 68, pp.39-46 (2017)

日本留学試験読解問題における出現漢字の分析

— 非漢字圏進学希望者への支援を目的として —

Analysis of Kanji appearing in previous Reading Tests in the EJU:

For the purpose of supporting college-bound learners with non-kanji backgrounds

林 希和子^{※1}

HAYASHI, Kiwako

キーワード : EJU、漢字、コーパス言語学、読解

Keywords: EJU, Kanji, Corpus linguistics, Reading

1. はじめに (背景および目的)

日本への留学生数は中国などの漢字圏の学生が減少し、相対的に非漢字圏の学生の割合が増加する傾向が続いている。それに伴い、非漢字圏学習者への学習支援は重要度が増している。筆者は林 (2022) において、非漢字圏学習者への進学支援を目的に EJU (日本留学試験) の読解問題における語彙の調査を行なった。その発表において、質問が寄せられたのが EJU 読解問題の出現漢字についてであった。日本語学校にとどまらず、大学においても漢字を指導する科目が新設される (荒 2019) など大学入学後も漢字学習に対する支援のニーズが高まっている。このような傾向は、留学生の多国籍化の推進と共に今後も続いていくと予想されるため、大学予備教育と大学における漢字学習のあり方については、そのつながりを含めて考えていく必要があるだろう。JASSO が「外国人留学生として、日本の大学 (学部) 等に入学を希望する者について、日本の大学等で必要とする日本語力及び基礎学力の評価を行なうことを目的に実施する試験」として位置付けた EJU においてどのような漢字が使用されているのかを詳しく検証することは、日本で学習する非漢字圏学習者を、大学予備教育からアカデミック・ジヤパニーズ教育へと繋げて支援する上で必要なことであると考えられる。

2. 方法

本研究では林 (2022) と同様に、EJU「日本語」読解過去問題を、MeCab (工藤 2006)、UniDic version

1.3.12 (伝ほか 2009) を用いてコーパス化し、CasualConc (Imao 2013) にて使用漢字の抽出を行った。今回対象としたデータは、2010 年第一回から 2022 年第二回までの 24 回分の試験テキストである。林 (2022) では、コーパスのサイズが異なり語数 6,977 語、延語数 91,668 語と、10 万語に満たないものであったが、今回データを追加したことで、異なり語数 8,687 語、延語数 104,108 語と 10 万語を超えるサイズとなった。抽出した使用漢字には、EJU での使用頻度と共に、「NTT 語彙データベース 2021」の親密度、既知率、複雑度を付与し、「Nihongo-Pro.com JLPT レベル別」から JLPT レベルを、「現代日本語文字データベース (CDJ)」 (松下 2013) からは「留学生用漢字・記号レベル」と「留学生用漢字・記号ランク」を付与して分析を行った。また、同データについて、初級教科書「みんなの日本語」での学習の有無、「よく使う順漢字 2100」 (徳弘 2008) の順位、「日本語学術共通語彙リスト」 (松下 2011) での出現の有無などの情報も付加した。

3. 結果および考察

この分析の結果、EJU 読解問題に出現した漢字は、1,715 字であった。松下 (2022) では、読解に必要な漢字について、書籍約 2,800 万語と「Yahoo 知恵袋」約 500 万語のテキストの分析結果として、ひらがな・カタカナ+漢字頻度上位 1000 字でカバー率が 95.1% に達することが述べられており、漢字 1000 字で中級終了というのがおおむね妥当だとしている。松下はその上で、いくつかの注意点にも言及しているが、この

^{※1} 大阪大学日本語日本文化教育センター非常勤講師

1000 字を仮に目安とするなら、EJU を受験する中級終了時点の学習者にとって、1,715 字は多いと感じられるだろう。出現頻度が 1 回の漢字を除くと 1,464 字、2 回の漢字を除いても、1,328 字である。

では、難易度についてはどうか。使用漢字 1,715 字のうち 1,544 字が常用漢字で、常用漢字以外の使用は 171 字である。頻度としては N3 レベルの漢字が最も多く使われており、漢字全体の 32%。N5~N3 までのレベルの漢字は 611 字で、個数としては全体の 36% ほどであるが、頻度では 80% を占めた。この 611 字のうち、初級教科書「みんなの日本語」で学習していない漢字は 170 字だが、N5・N4 レベルの 246 字の中の未習漢字は「的・公・駅」の 3 字のみであった。

次に、CDJ (松下 2013) から付加した「留学生用漢字・記号レベル」を用いた分析について述べる。「留学生用漢字・記号レベル」は主に日本の大学で学習する留学生に役立つかという観点から作成されたレベルであり、IS_01C が最も役立つと想定されている。EJU の読解問題の出現漢字では IS_01C から IS_21C+ までの 21 のレベルが確認された。それぞれのレベルの EJU における頻度を図 1 として示す。EJU における IS_01C は「人」「生」など 99 字で 13,248 回、全体の 24% を占めた。IS_01C から IS_10C (Top1000) までの漢字は 974 字であったが、これだけで全体のおよそ 94% を占めている。レベルが低いもので比較的多く出現していた字としては、IS_21C+ の「昆」(36 回) IS_17C の「殖」(36 回) などが挙げられる。これらは、引用文献の 1/4 程度を占める生物系テキストの中の「昆虫」「繁殖」の頻度が高かったことが影響したと推察される。逆に CDJ のレベルが高いもので EJU に出現しなかったものとしては、IS_01C の「七」、

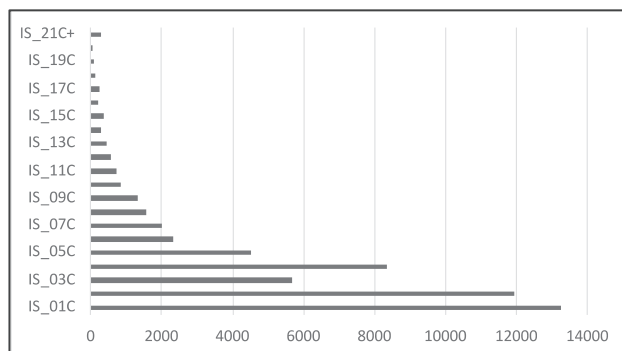


図 1 CDJ 「留学生用漢字レベル」の EJU での頻度

IS_02C から IS_10C まででは「軍」「馬」「皇」など 19 字があった。この 19 字は比較的ジャンルに偏りが見られたので、大学の専門によっては学習しておく必要を感じた。

4. おわりに

漢字を覚えることを困難な作業と感じる非漢字圏学習者にとって、EJU の読解問題に出現する漢字は種類こそ多いが、出現頻度としては、初級漢字の占める割合が高く、基礎を固めることの重要性が改めて明確になったと言える。また、CDJ を用いた分析からは、EJU 読解問題における漢字が、日本の大学における学習に役立つものを中心に出题されていることも明らかになった。大学とその予備教育における漢字学習で本研究の結果を効果的に活かす方法を今後模索していきたい。

(blb1012kiwa5@gmail.com)

付記

本研究は、JSPS 科研費 21H00537 の助成を受けている。

参考文献

- 1) 荒まゆみ：留学生の漢字力分析, 尚美学園大学総合政策論集, 28, 37-50 (2019)
- 2) 工藤拓：MeCab Ver.0.996 (形態素解析器) (2006)
- 3) 伝康晴・山田篤・小椋秀樹・小磯花絵・小木曾智信：UniDic version 1.3.12 (解析辞書) (2009)
- 4) 徳弘康代 日本語学習のためのよく使う順漢字 2100 三省堂 (2008)
- 5) 林希和子 日本留学試験読解問題の語彙コーパスの作成と分析, 第 24 回専門日本語教育学会研究討論会誌, pp.4-5 (2022)
- 6) 松下達彦：日本語の学術共通語彙 (アカデミック・ワード) の抽出と妥当性の検証, 2011 年度日本語教育学会春季大会予稿集, 244-249 (2011)
- 7) 松下達彦：「現代日本語文字データベース (CDJ) Ver. 2.0 (教師用)」(2013)
- 8) 松下達彦：漢字学習と語彙学習はどうあるべきかーテスト, コーパス, データベースの分析から考えるー, 第二言語としての日本語の習得研究, 25, 112-117 (2022)
- 9) Imao, Y.: CasualConc (Version 2.1.2) (2013)

大学初年次のアカデミック・ライティングの要約文指導における「抜き書き」の問題

Teaching academic writing summaries and “extraction” for first-year college students.

湯浅千映子^{*1}
YUASA, Chieko

キーワード：要約、初年次教育、アカデミック・ライティング、学部留学生

Keywords: summary, First-Year Experience, Academic Writing, undergraduate foreign students

1. はじめに（背景および目的）

学部留学生は、大学入学後、日本人学生と共に「基礎演習（ゼミナール）」や「文章表現法」などの初年次教育科目を受講し、大学初年次の「学修」で必要とされる、情報探索、文献読解、引用、レポート作成などの基本的なアカデミック・スキルを身に付ける。これらの段階的なスキル修得の過程では、読むことと書くことの横断的な技能である「要約力」が深く関わる。初年次授業で課される「ブック・レポート」は、（課題図書の概要や間接引用などの）アカデミック・スキルの要素を内包し、初年次学生にとって要約の機会が多い。

「要約」とは何か。日本語学会編（2018:990）『日本語学大辞典』の「要約」の項（佐久間まゆみ氏執筆）で、「文章と談話の主な内容を短くまとめて表現すること、また、その表現自体」であり、「一般に、理解主体（読み手・聞き手）が目的や内容に応じて、元の文章（「原文」）・談話（「原話」）の主旨を変えずにより少ない言語量（文字数・発話量）でまとめる言語行為」とし、（④原文・原話の主題文と中心文の把握、⑤要約文の内容の再構成などの）「7種の要約行為の過程」があるという。

二通（2006：101）は、「大学のレポートや論文では、文献や資料など外から得た情報を参照しながら書く」ことが多く、（「長い文章から必要な情報を取り出す」・「要旨を読み取り自分の言葉でまとめる」などの）自分自身の問題意識に基づく「能動的な読み方」が必要になるという。

本研究における「要約力」とは、信頼できる情報源（一次資料）から得た情報を客観的な事実として適切に扱い、その情報を取捨選択し、レポート課題の形式に沿って、まとめて表現する能力をさす。この「要約力」は、所与の文章の構造を把握し、主題文や中心文を再構成してまとめるだけではなく、授業で学んだ知識や自身が調べた情報を組み立て直し、自分自身の中に取り込む過程（井下 2008・2013「知識の再構造化」）も含むものとする。

2. 方法

湯浅（2023）は、80年代～2020年代の日本語教育分野の「要約」を扱った論文（計28編）の「文献調査」で、2010年代以降、学部留学生の「書くための要約指導」が主流となり、間接引用や箇条書きなどの「要約」を取り上げる研究が増えたとした。これらの研究では、原文の表現をそのまま用いる「抜き書き」に問題があると指摘する（鎌田・仁科 2009「原文からの抜き出し」／小森 2018「原文の転用」）。

実際、初年次の日本語母語話者の学部学生155名と学部留学生158名を対象に、「ブック・レポート」の作成を想定し、新聞社説（約800字）の概要を140字前後にまとめる「要約文調査」で、原文との比較をしたところ、学部留学生の要約文では、重要だと思う1文を全て「抜き書き」する例が目立った。

本発表では、学部留学生による要約文の「抜き書き」という現象に着目し、(1)要約文の「文献調査」で見た「抜き書き」による問題点や課題、指導方法などを整理し、(2)「要約文調査」の分析結果を報告

^{*1}大阪観光大学国際交流学部教授

する。原文と要約文を、佐久間編（2010）の分析単位「情報伝達単位（CU）」によって分割し、両者を対応させ、要約文中に原文のCUがどの程度残存するか、高残存となるCU、原文の「話題文」・「主題文」のCUの残存状況（「ZG（原文と同じ）」・「ZP（言い換え）」・「ZE（誤用）」の残存数）を比較・分析し、「抜き書き」の実態を明らかにする。さらに(3)で「要約力」を活かした発展的な活動として、複数テキスト（同じテーマで内容が対応し、文章構造が類似する日本語教科書と日本語学の概説書）を課題図書とし、両テキストの要点をまとめ、「ブック・レポート」を作成する学びを紹介する。

3. 結果および考察

(1)「抜き書き」を問題視した要約文研究（2000年代も含む）の多くは、要約者の既有知識で作上げた「状況モデル」（Kintsch1994）に言い換え、パラフレーズしたものを理想的な要約文だとする。小森（2018）は、原文内容に関する背景知識が不十分であれば、言語熟達度の高い留学生でも原文を転用するとし、内容に関する情報を授業内で提示する、学生自身に正しく情報を収集させ、内容を十分に理解したか確認するなどの指導が必要であるという。

(2)学部留学生の要約文は、原文の言い換えのない「ZG」のCUの残存数が高い。原文の話題文や主題文（の位置）が把握できた留学生であっても、規定文字数の中に原文を「抜き書き」し、文が途中で終わる「未完の誤用」（例「～学び。」）、主語や目的語を省略した原文を（前後の文脈なしに）「抜き書き」し、意味が通らない「脱落の誤用」も見られた。

(3)「複数テキスト」を要約したレポート作成では、学生に原文A・Bの違い（文章構造や内容面、ジャンル）に注目させ、出題意図によってレポートのまとめ方が異なる（書き手の意見主張中心・事実や例の説明中心）ことを認識させてから要点をまとめて書く練習を行った。「複数テキスト」の読解は、比較のポイントを意識しながら読み、「逐語的な読み」を避け（二通2006）、つまり「抜き書き」ができないことや「個々のテキストの情報を補い合い、論点を把握できる」（田川2022）などの利点がある。

4. おわりに

学部留学生にとって、原文を読解し、要約することそれ自体が主観的な経験を通じて情報や知識を得る機会となる。情報を整理し、再構成することで理解が深まり、自身の知識の幅を広げていく。初年次の学部留学生のライティング教育は、「要約力」を軸に据えたレポート作成の学びによって実現する。

(c-yuasa@tourism.ac.jp)

注

注1 二通（2006: 108）は、文章の一部を切り取るなどの「剽窃」問題を解決するには、読み手がテキストと適度の距離を保ち、文章中の事実と意見の区別を意識し、主体的に文章に立ち向かえるようになることだという。二通（2006: 110）は、「アカデミック・ライティングにつながる読みの学習」として、「同じ話題で意見や観点が異なる複数の文章を比較しながら読む」などを挙げる。

注2 井下（2008: 4）は、「ディシプリン（学問分野）での学習経験を自分にとって意味のある知識として再構造化する力」を「知識の再構造化」とした。

参考文献

- 1) 井下千以子：大学における書く力考える力—認知心理学の知見をもとに一，東信堂，（2008）
- 2) 小森和子：言語能力と背景知識が第二言語の論文執筆に与える影響—要約課題を通して—，明治大学人文科学研究紀要，Vol.82，pp.195-221（2018）
- 3) 佐久間まゆみ編著：講義の談話の表現と理解，くろしお出版，（2010）
- 4) 田川麻央：要約活動が日本語学習者の複数テキスト理解に及ぼす影響，明海大学外国語学部論集 Vol. 34，pp 1-10.（2022）
- 5) 二通信子：アカデミック・ライティングにつながるリーディングの学習，門倉正美ほか編，アカデミック・ジャーナリズムの挑戦，ひつじ書房，pp.99-113（2006）
- 6) 湯浅千映子：新聞社説と要約文の表現類型—学部学生・学部留学生による140字大意の比較—，日本語／日本語教育研究，Vol.12，pp.213-228（2021）
- 7) 湯浅千映子：日本語教育における要約観—学部留学生のアカデミック・ライティングのために—，日語日文学研究，Vol.127，pp.167-187（2023）

日本語学習者の動機づけ向上を目的とした読解シリアスゲームの開発と実践

Design and Implementation of a Serious Game for Reading: Enhancing the Motivation of Japanese as a Second Language Learners

○岩本 穰志^{※1} シン・ジュヒョン^{※2} 稲葉 光行^{※3}
IWAMOTO, Joji SHIN, Juhyung INABA, Mitsuyuki

キーワード：シリアスゲーム、読解、動機づけ、ARCS モデル
Keywords: Serious Games, Reading, Motivation, ARCS Model

1. はじめに

近年、日本語教育において、多読の試みが盛んに行われており、Graded readers の多読用教材も数多く作成されている（二宮・川上 2012 等）。しかし、授業内で多読に取り組む時間を確保することは容易ではなく、教室外での学習者の自律的な取り組みが求められる（二宮・川上 2012）が、読書に苦手意識があり、母語でも読書習慣がない学習者にとっては、日本語での多読は大きな負担となる（池田 2020）。

こうしたことから、学習者の読書への関心と動機づけを高め、心理的負担を軽減するため、ゲームの持つ学習意欲向上の効果に着目した。近年は脱出ゲームや謎解きといったシリアスゲーム^{註1}を用いた教育実践も行われ、その効果が報告されている（浅田ら 2021 等）が、第 2 言語学習における多読用教材への応用は管見の限り見られない。本研究では、読解シリアスゲーム「衣笠陰陽伝」を作成してテストプレイを行い、ゲームの活用が学習者の読解活動への取り組み方や動機づけにどのような影響を与えるかを探索的に検討した。

2. テストプレイ用シリアスゲームの概要

シリアスゲーム形式の読解によってどのような結果が得られるかを測るため、まずは 1 時間程度での読了を想定したゲームを作成することにした。

テストプレイの参加者は京都の大学で日本語を学

ぶ留学生とし、ストーリーには渡辺綱の鬼退治や陰陽師等、京都の民話や伝承の要素を盛り込んだ。これにより、彼らが留学生活を送る京都の文芸や文化財への関心を喚起することも目的とした。

また、将来的に町を散策し、寺社仏閣や文化財を巡りながらゲームを行うことも想定し、その前段階として参加者がキャンパスマップを手に大学キャンパスを歩く形式を取った。参加者は建物の壁に貼られた QR コード^{註2}をスマートフォンで読み取り、表示された章の内容を手がかりにアイテムを入手したりしながら次の章の QR コードを探し、鬼を退治できればクリアという流れである。

謎解きや民話、伝承といった要素を含むことから、初級学習者にはやや難易度が高いのではないかと考え、設定レベルは中級後半から上級前半とした。字数は全部で 4,600 字であった。

京都の衣笠を舞台とした陰陽師のストーリーであることから、タイトルは「衣笠陰陽伝」とした。

3. テストプレイ

2023 年 7 月 9 日に行われたテストプレイには、中級後半～上級前半クラスに所属する 6 名の留学生に加え、初級後半の留学生 1 名と上級を終えた留学生 1 名も応募し、参加者は計 8 名となった（表 1）。

参加者にはペアに分かれて取り組んでもらい、筆者がそれぞれのペアの様子を観察しながら進めた。途中で行き詰まり、苦戦したペアもあったが、全てのグループが予定通り約 1 時間でクリアした。

※1 立命館大学日本語教育センター嘱託講師

※2 立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員

※3 立命館大学政策科学部教授

	レベル	出身	読書習慣 (母語)	読書習慣 (日本語)
A	初級後半	オーストラリア	よく読む	時々読む
B	中級後半	ノルウェー	あまり読まない	時々読む
C	中級後半	ノルウェー	あまり読まない	時々読む
D	中級後半	スペイン	全く読まない	全く読まない
E	上級前半	イタリア	よく読む	あまり読まない
F	上級前半	イタリア	よく読む	よく読む
G	上級前半	アメリカ	よく読む	時々読む
H	上級終了	韓国	よく読む	よく読む

4. デブリーフィング

テストプレイ終了後に、参加者全員でデブリーフィングを行い、参加者のコメントを Keller (2009) の ARCS 動機づけモデルに基づいて分類した。

1) 「注意 (Attention)」要因

ストーリーが面白かったという感想が多く聞かれた。また、陰陽師の能力を獲得して呪文を唱えたり、五芒星を描いて鬼を封印したりといったギミックが面白かったという声もあった。

2) 「関連性 (Relevance)」要因

テーマが自らの関心と合致していたという評価が多かった。また、普段から日本の鬼退治や呪術をモチーフとしたアニメに親しんでいるので、理解しやすかったといった意見もあった。

3) 「自信 (Confidence)」要因

初級後半の参加者がやや難しかったと回答した以外は、全員が適切な難易度だったと回答した。一方で、神様と内容との関係性を理解するのが少し難しかった、最初に陰陽師や鬼に関連する語彙を目にした時、戸惑ったという意見も聞かれた。

4) 「満足感 (Satisfaction)」要因

ゲームの満足感が高かったようで、参加して良かったという声が多く聞かれたほか、ペアの学生と役割を決めて取り組めた、教え合えて良かったといった意見も聞かれ、ペアでのピア・リーディングも満足感につながっていたようだった。

5. 考察とまとめ

デブリーフィングでは、ARCS モデルの 4 要因のうち、特に「注意」「関連性」「満足感」において

肯定的なコメントが多く聞かれた。こうした面で評価を得られたことや、授業では 1,000 字程度の文を読むのに苦戦している留学生たちが、約 4,600 字に上る文を 1 時間で読み終えたことから、シリアスゲーム形式での読解活動には一定の成果があったと言えるだろう。また、民話や伝承のようなテーマが学習者に強くアピールすることも示唆された。

一方で、こうした効果が長期に渡って保持され、自律的な多読につながるかは未知数である。また、謎解き、キャンパスでの探索、ペアでのピア・リーディング等、多くの要素を詰め込んだため、何が効果的に働いたのかわかりにくくなってしまった。

今後はこうした部分を整理した上で実践を重ね、学習者がより自律的に取り組むことができる多読用シリアスゲームにも取り組んでいきたい。

(jojiiwamoto@gmail.com)

注

注1 エンターテインメント以外の社会の諸問題の解決のために利用されるデジタルゲーム (藤本 2007)。

注2 (株)デンソーウェブの登録商標であり、1994 年に開発された 2 次元コードの一種。

参考文献

- 1) 浅田義和, et al.: 脱出ゲームにシミュレーションを組み合わせた、初年次教育の新たな試み, 医学教育, Vol.51, No.6, pp.685-689 (2020)
- 2) 池田庸子: 読書が苦手な学習者の語りからみた多読授業の効果と影響, 茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究, No.4, pp. 39-46 (2021)
- 3) 二宮理佳・川上麻理: 多読授業が情意面に及ぼす影響—動機づけの保持・促進に焦点をあてて—, 一橋大学国際教育センター紀要, No.3, pp.53-65 (2012)
- 4) 藤本徹: シリアスゲーム: 教育・社会に役立つデジタルゲーム, 東京電機大学出版局 (2007)
- 5) Keller, J. M.: Motivation Design for Learning and Performance; The ARCS Model Approach, Springer Science & Business Media (2009) (鈴木克明 監訳: 学習意欲をデザインする: ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン, 北大路書房 (2010))

大学院基礎共通科目における留学生への 研究活動支援

— 「学術研究の技法 I」での取り組み—

Supporting Research Activities for International Students in Basic Common Subjects of
Graduate School: Through Techniques of Academic Research I

鈴木 秀明^{※1}

SUZUKI, Hideaki

キーワード：支援、研究活動、留学生、ピア・ラーニング

Keywords: supporting, research activities, international students, peer learning

1. はじめに（背景および目的）

大学院に在籍する留学生が円滑な研究活動を進めるには、専門知識に加えて論文執筆やプレゼンテーションなどの高度のアカデミック・ジャパニーズが必要である。入学試験時に各種能力を確認しているが、留学生の日本語習熟度と専門知識には個人差があるため、大学院入学後も留学生への継続的な日本語学習支援と研究活動支援が必要とされている。

筆者の所属する高等教育機関では、人文学、社会科学、臨床医学などの研究科で留学生を受け入れているが、研究活動支援の内容、支援体制などは研究室、研究科に一任されている。そのため、留学生の受け入れに慣れていない研究科や留学生支援に熟練していない教員にかかる負担も大きい。よって、教育機関内では専門分野の垣根を超えた留学生に対する支援の整備が重要な課題となっていた。

近年の大学院留学生への研究支援には、村岡（2023）、福良（2023）などがあり、同一教育機関において海外からの留学生への研究支援の実践例を述べている。これらの先行研究では、授業や日本語教育などの事例を通して、教育機関内での連携や関係者間の協働の重要性を報告している。

本実践では、筆者の所属機関において 2023 年度に新設された大学院基礎共通科目の「学術研究の技法 I」での実践を報告し、大学院基礎共通科目における留学生への研究支援の可能性を検討していく。

2. 本実践

大学院基礎共通科目「学術研究の技法 I」^{注1}の受講生は修士課程 1 年生 11 名（留学生 9 名^{注2}・日本人学生 2 名）で、人文学および社会科学の 3 つの研究科に在籍している。受講生の背景を表 1 に示す。

研究科	留学生	日本人
経営学	4	0
国際交流	3	1
言語文化	2	1

本科目では、様々な研究科に所属する修士課程 1 年次の受講生が対象である点を考慮し、「日本語で研究技法を学び、研究活動に必要な日本語運用力を向上する」ことを学習目標としてシラバスを作成した。また、日本語能力と研究技法に関する専門知識が同時に育成できるように、佐渡島他（2021）を教材として使用した。

毎回の講義では前半に文献講読、後半にグループワークを実施した。文献講読では、佐渡島他（2021）「第 2 部：論文編」を実施した。毎回受講生が輪番でレジュメを作成して発表し、全体で質疑応答を行った（学期中 1 人 2 回）。その後のグループワーク（3～4 グループ）では、当該回の文献講読で学んだ研究技法を自身の研究内容にどのように反映させるかを互いに説明、質問させた。グループは異なる研究科の受講生で構成され、母語の異なる留学生と日本人学生が一緒になるように配した。

^{※1} 目白大学外国語学部教授

教師は、文献講読の該当箇所の解説、研究技法に関する質疑応答、グループワーク時の進行補助などを主に担当した。また、日本語学習の活動として、レジュメの作り方、メールの書き方、発表の仕方、研究計画書の書き方なども始動した。さらに、受講生が提出した各種課題の添削および受講生へのフィードバック（全体・個別）も行った。

事後課題では、文献講読で扱った内容の理解度の確認、文献講読の発表者に対するピア評価（発表者は自己評価）とその理由、グループワークでの学びや感想を GoogleFoams で回答させた。学期末課題として、本講義で学んだ研究技法を反映した研究計画書の執筆を課した。

3. 結果・考察

まず、授業内での教師の観察を通して、以下のことがわかった。学期開始直後は日本語でのコミュニケーションに積極的な留学生がいる一方、自身の日本語力（特に口頭表現）に不安を感じている留学生も少なくなく、グループワークでの日本語でコミュニケーションに躊躇する姿も見られた。しかし、受講生全員が修士課程1年という同じ立場であることから、徐々にクラス内でラポールが形成され、日本語でのコミュニケーションが活発になっていった。同時に、グループワーク時に日本人受講生は自発的に留学生に対する日本語支援（文章表現・口頭表現）を行う姿も見られ始めた。そして、留学生は研究計画（研究目的の立て方、研究方法の選択、分析方法）に悩みや不安を抱えている日本人受講生に対し、日本語で質問や助言を積極的に行い、一緒に修正案を検討する姿も見られた。

次に、留学生が作成した1回目と2回目のレジュメを比較した結果、2回目のレジュメは日本人受講生が作成したレジュメの良い点（レイアウト、表記、日本語表現等）を参考にし、読み手の理解を促進し日本語表現も正確なものに改善されていった。この点に関して、留学生が提出した事後課題（GoogleFoams）を見ると、「日本人受講生が作成したレジュメや発表を見て、自身の日本語力の不十分さを認識し、さらなる日本語力向上のための練習や事前準備が必要だ」、「留学生と一緒に安心して学べる学習環境が提供されて

いる点が良い」、「ゼミや大学院の専門の授業の他に研究内容や研究技法が相談できる場があるのはありがたい」、「日本人が作成したレジュメや発表を見て日本語表現が学べる点も良い」など、受講生同士のピア・ラーニングを肯定的に捉えるコメントも多数記述されていた。

これらの点から留学生は「学術研究の技法Ⅰ」において、日本語で研究技法を学びつつ、日本語運用力を向上するための活動を、ピア・ラーニングを通して実践していると思われる。それと同時に、本科目は専門分野を超えた留学生と日本人の交流の場としての役割も担っていると考えられる。

4. おわりに

本実践では大学院留学生に対する大学院基礎共通科目の「学術研究の技法Ⅰ」での研究活動支援を報告した。本科目は開設間もないため、今後は教育機関内の日本語教員、大学院研究科指導教員、受講生（留学生・日本人）の声を丁寧に取り上げ、関係者間との連携や協働を深め、持続可能な留学生への研究活動支援体制を構築していきたい。

（メールアドレス h.suzuki@mejiro.ac.jp）

注

注1 「学術研究の技法Ⅰ」は春学期開講科目で、主に留学生対象の科目だが、日本人学生も受講可能である。また、秋学期に「学術研究の技法Ⅱ」も開講されている。

注2 留学生の背景は、中国8名とタイ1名である。

参考文献

- 1) 佐渡島沙織・吉野亜矢子：これから研究をかく人のためのガイドブック-ライティングの挑戦 15 週間（第2版）,ひつじ書房（2021）
- 2) 福良直子：留学生への日本語プレゼンテーション教育-研究室と日本語教育を結んで,大学院留学生への研究支援と日本語教育 専門分野の違いを超えて,ココ出版 pp.37-56（2023）
- 3) 村岡貴子：留学生の研究活動を支える専門日本語教育,大学院留学生への研究支援と日本語教育 専門分野の違いを超えて,ココ出版 pp.3-18（2023）

「高専留學生の実験レポートの書き方」テキストを用いたレポート執筆指導とその効果

Report writing instruction using the textbook "How to write experiment reports for foreign KOSEN students" and its effect

○ 山田朱美^{※1} 加藤学^{※2}
YAMADA, Akemi KATO, Manabu

キーワード：レポート，高専，専門用語，文体，日本人チューター
Keywords: reports, technical colleges, terminology, literary style, Japanese tutors

1. はじめに（背景および目的）

国立高等専門学校機構は、モンゴル・タイ・ベトナム等の国を対象に「日本型高等専門学校教育制度（KOSEN）」の導入支援を行っている。この取り組みの中で、タイ高専の學生が日本の国立高専で学ぶ機会を提供する仕組みとして、3年次編入学試験を実施し、2021年4月に4名の留學生が編入学してから、当該システムを用いた入学者数は増加しており、留學生のバックグラウンドの多様化が進展している。

受け入れ側の高専は、基本的に日本語のみで専門科目の講義を実施しており、これら日本語による教育システムで理工系のアカデミックジャパニーズまでカバーすることは難しい。こうした背景のもと、国立高専機構では2021年より日本語教育等拠点校の制度を導入し、拠点校1校あたり10校程度の高専留學生に対する日本語教育支援を行うこととなった。

拠点校の取り組みの一つとして、留學生および専門教員から要望の高かった実験レポート執筆のための日本語ライティング教材を筆者らは作成した¹⁾。本テキストは留學生が自学できることを目指しているが、本年度はこのテキストを用い、実際に講義したので、その効果と課題について述べる。講義そのものは日本語教員でもできることを目指しているが、物理の実験レポートの添削までは難しい。そこで、日本語教員による本テキストを用いた講義およびチューターによる予備添削の試みについて報告する。

2. テキストの内容

本テキストは、高専3年次で共通知識として必要とされる物理の力学分野における「斜面上の物体の運動」を題材とし、実験動画とともに提供される。テキストの構成は「1章 実験レポート作成のための一般的な注意事項」（内容は日本人學生向けの指導と同じ）、「2章 良い実験レポートの書き方のポイント」（留學生特有の間違い事例の指摘）、「3章 留學生の実験レポートの間違いの分類とその理由」（後述5章の留學生特有の間違い事例の分類と解説）、「4章 アンケート」、「5章 実験レポート添削見本」（専門教員と日本語教員双方による実験レポート（16編）の添削）、「6章 用語集」から成る。

3. 方法

今回のレポート書き方授業は、2023年6月～12月の間、津山、石川、宇部、阿南の4高専において実施した。いずれの高専においても日本語教員が授業を担当した。受講者の学年と国籍を表1に示す。

表1. 受講者の学年と国籍

	3年生	4年生	国籍
津山高専	7		タイ、マレーシア、カンボジア
石川高専	4		マレーシア、モンゴル、マリ
宇部高専	4		マレーシア、チュニジア、ベナン、ラオス
阿南高専	2	2	タイ、ラオス、イラン

3年生が主な対象なのは、3年生から専門科目のレポート執筆が本格化するからである。先ず1章、3章を中心に日本語教員が講義した（約120分）。その後、留學生は実験動画を見、模擬レポートを実際に執筆し、専門教員と日本語教員の2名が添削した。

^{※1} 津山工業高等専門学校海外展開促進 特命准教授

^{※2} 津山工業高等専門学校総合理工学科 教授

それとは別にチューターもテキストを参考に、自力で添削（1本あたり45分）した。このチューターは3,4年生が自由選択で履修するプロジェクト型科目の1テーマ「日本語教育学研究」を履修している3年生の日本人学生である。最後に関係者に自由形式のアンケートを行った。

4. 結果および考察

4.1 チューターによる添削

「実験結果と考察」にかかる節の添削結果を図1と図2に示す。図1は専門教員と日本語教員による、図2はチューターによる添削である。教員の添削を基準としてチューターの添削を検討した結果、日本語の問題の中に幾らかの見落としはあるものの、内容面で教員のそれよりも丁寧な提案がなされている部分もあり、予備添削として十分な水準にあると考えられる。留学生のレポートに対しては、主に口語体で書いてしまうミス、ひらがなで書いてしまうミスなどが指摘されたが、レポートとしての形式から逸脱している事例は少なく、専門教員に頼らずとも、先輩チューターによる指導で修正できることが明らかとなった。

4.2 アンケート結果

この試みに関する意見は以下の通りである。

○日本語教員側の意見

- ・講義で使ってみたいが添削できるかどうか不安。

○留学生側の意見

- ・先輩の実験レポートの執筆事例があったのでとても参考になった。
- ・力学だけでなく他の科目の例も欲しい。

○専門教員側の意見

- ・レポートの形式についても大きな問題はない。
- ・ですます調の文章にしてしまう例が目立つ。
- ・考察の中身はまだまだだが、これはレポート執筆に慣れていない日本人学生においても同様の課題。
- ・これまで形式や日本語が整わず、内容に踏み込めなかったが、中身のアドバイスができる程度の仕上がりになっている。

○チューターの意見

- ・添削することが自分自身の学びとなり、成長にも繋がる。また添削を通じて留学生とのコミュニケーションが増えた。

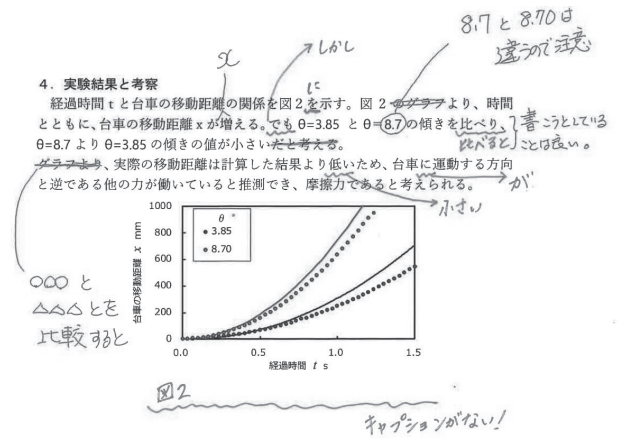


図1. 専門教員と日本語教員によるレポート不備の指摘

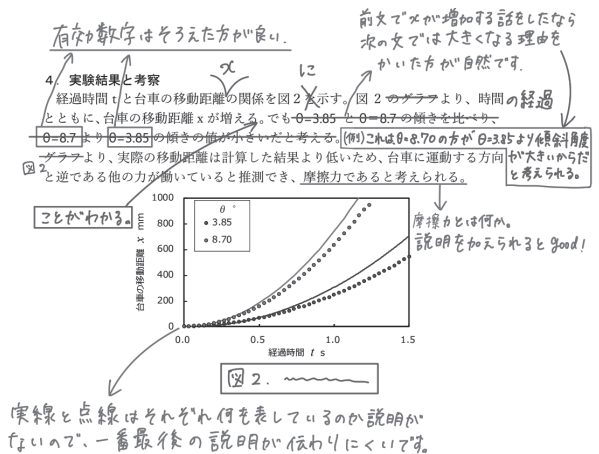


図2. チューターによるレポート不備の指摘

5. おわりに

「高専留学生の実験レポートの書き方」テキストを用いて講義を行った。講義を行うことでチューターでも十分に校閲できるレベルのレポート執筆が可能であることが確認された。書かれている内容の正しさは専門教員の添削が必要ではあるが、専門教員が内容に集中できる程度のレポートの仕上がりになることがわかった。これは高専専門教員の業務過多を解消する一助にもなると期待する。今後、更に効率的な教育手法の開発を検討し、文例を伴う専門用語集を作成することも視野に入りたい。

付記 本研究はJSPS 科研費 JP23K00623 の助成を受けたものである。

(yamada-a@tsuyama-ct.ac.jp)

参考文献

- 1) 山田朱美 加藤学 : 「高専留学生の実験レポートの書き方」教材作成, 2022 年度日本高専学会第 28 回年会講演会

ビジネス場面における日本語漢字語彙受容現象の考察

—在中自動車部品メーカーを例に—

Investigation of the Acceptance Phenomenon of Japanese Kanji Words in the Business Context:
A Japanese-Owned Automobile Parts Manufacturing Company as an Example

○黄 寛宇^{※1} 劉 偉^{※2}
Huang, Kuanyu Liu, Wei

キーワード：言語接触、借用、日本語漢字語彙、中国語、受容

Keywords: Language Contact, Borrowed Words, Japanese Kanji Words, Chinese, Acceptance

1. はじめに

中国で事業展開している日系企業では、「约会议与对方打合一下」などのように、中国人従業員（以下、CJ）は日本語能力の有無を問わず、一部の日本語漢字語彙（以下、漢字語）の意味を維持しながら、表記と音声を中国語で表現する現象がよく見られる。この現象は「ある言語の母語話者によって他言語の特徴を母語に取り入れるプロセス：母語は維持されるが、追加の特徴によって変化が生じる」¹⁾という「借用」であると考えられる。即ち、上記の現象は中国語と日本語の言語接触による語彙の借用に属する。中日両言語の接触による語彙の借用に関する研究はこれまで数多く行われている²⁾。一方、ビジネス場面に注目する研究は少数にとどまる。

そこで、本研究は中国の大手日系自動車部品メーカー（以下、A社）における中日言語接触に焦点を当て、(1) CJが中国語で表現する漢字語の特徴は何か、(2) それらの漢字語の使用の影響要因は何かといった問題について調査・分析を行った。

2. 研究方法

問題 (1) については、A社の社員である CJ6名（N2レベルと日本語能力無しの者各3名）の業務に用いる漢字語と用例を収集し、日本文化庁（1978）⁴⁾の基準に沿って分類し、中日のビジネス場面における表記、意味、品詞の比較を行う。

問題 (2) については、6名の CJ に対し、①漢字

語への理解と記憶方法、②漢字語の使用に影響する要因、③業務時間外や外部者に対する漢字語の使用状況についてインタビューを行う。インタビュー時間は40～60分/名で、CJの了承を得て録音して文字化し、質的データ分析ソフト MAXQDA 2022 でコーディングを行い、理解・使用モデルを作成する。

3. 結果および考察

3.1 CJにおける漢字語の使用実態

問題 (1) での調査で 38 語収集でき、そのうち、S語（中日両言語の意味が同じか極めて近いもの）、O語（中日両言語の意味が一部重なるもの）、D語（中日両言語の意味が著しく異なるもの）はそれぞれ 3語、10語、4語であり、N語（日本特有の漢字語）は 21語で6割近くを占めている（表1）。

38語は基本的に日本語の意味で使用されているが、例1のように、O語は中国語の意味で使用されることがある。また、例2のように、中国語の表現があるにもかかわらず、漢字語をそのまま中国語読みで使用することが見受けられる。

例1 我承认这件事我们做得不够周到。

例2 这件事情涉及到 JPH 产能爬坡，需要和制造部门合意一下。

表1 A社で使用される漢字語の分類

分類	語例	語数
S(Same)	課長、各位、夾雜物	3
O (Overlap)	担当、対応、展開	10
D (Different)	依頼、検討、合意	4
N (Nothing)	出向、打合、原低	21

※1 華南師範大学大学院生

※2 華南師範大学准教授

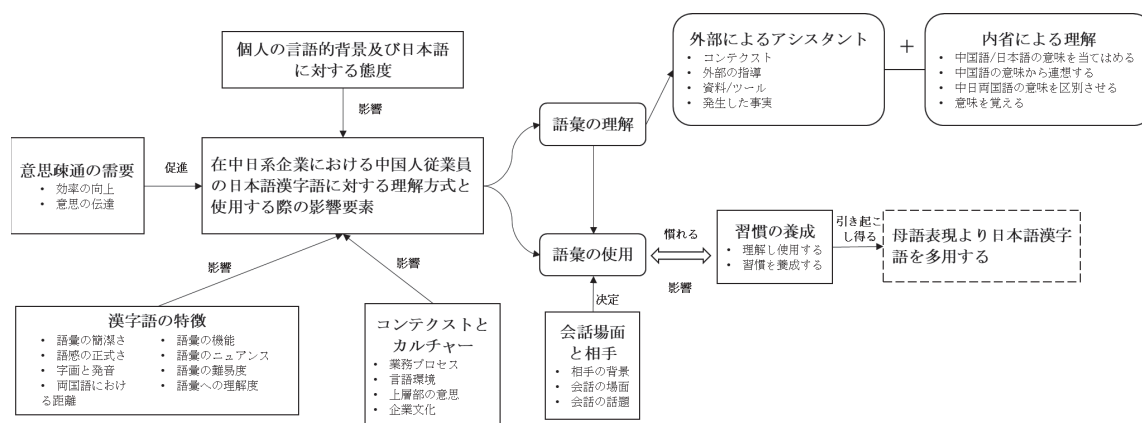


図1 CJにおける日本語漢字語の理解・使用モデル

また、品詞については、中日で同様なもの若しくは日本語の品詞を保持するものは35語で、「保全」「協力」と「上申」の3語は一部の品詞を継承して使用されている。

それらの漢字語の読み方は、音読みが32語で圧倒的に多く、訓読み(3語)、重箱読み(2語)、湯桶読み(1語)は少数である。表記については、中日で類似するものは35語あり、「係長」、「課長」と「仕様書」の3語のみが中日で表記が顕著に異なっている。中国語の発音に近いもの、字形の類似したものが受け入れられる傾向が伺われる。

3.2 CJにおける漢字語使用の影響要因

問題(2)について調査・分析した結果、A社におけるCJにおける漢字語の理解・使用モデルを得た(図1)。漢字語理解には、「外部によるアシスタント」(コンテキスト、外部の指導など)と「内省による理解」(意味の当てはめ、連想など)の二通りある。使用の影響要因として「個人の言語的背景や日本語への態度」、「漢字語の特徴」(簡潔さ、ニュアンス、難易度など)及び「コンテキストとカルチャー」(言語使用の環境や日本人上司の意思)などがあげられる。日本人社員を含めた関係者との意思疎通の需要がCJの漢字語使用を促す原因であり、会話のコンテキストや相手によって使用するかが判断されており、基本的に日系企業のコミュニティー内や業務関連の話題にのみ使用される。

一部のCJは最初に社内の漢字語使用に困惑を抱くが、徐々に漢字語の意味を理解し、社内コミュニティーで使用するようになったケースがある。また、

「漢字語の使用が効率よく意思疎通でき、母語に対応する表現を探す苦勞をせずに済む」ため、母語表現より漢字語を使用するケースも観察された。

4. おわりに

本研究は中国日系自動車部品メーカーにおける日本語漢字語の特徴及び使用の要因について検討した。日本語漢字語(特に音読みの漢字語)はCJに受容され、社内用語として定着し、表記、意味、品詞もほぼ維持して中国語に借用していることが明らかになった。また、漢字語の理解・使用は複数の要因に影響され、使用回数の増加が慣習化を生み、母語より日本語漢字語彙を使用する傾向が一部観察された。

本研究は、中国人新入社員に共通用語である日本語漢字語を理解させ、職場に順応させるために、各職場の用語と用例の整理し、社内教育やOJTの指導などの実情に応じた支援に示唆が得られる。

(ottoafc@163.com)

参考文献

- 1) Thomason, S.G. and Kaufman, T.: Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics, Berkely and Los Angeles, California: University of California, pp.37 (1988)
- 2) 朱京偉: 近代中国詞彙交流的軌跡: 清末報紙中的日語借詞, 北京: 商務印書館 (2020)
- 3) 周菁: 漢語形容詞中的日語借詞, 日語学習与研究, 04, pp.60-71 (2023)
- 4) 日本文化庁: 中国語と対応する漢語, 東京: 文化庁, pp.5-18 (1978)

中国人日本語学習者の依頼メールにおける 配慮の表し方

ーモデル文からの気づきに着目してー

How Chinese learners of Japanese express thoughtfulness in request emails:
Focus on the findings from the model emails.

須賀 和香子^{※1}
SUGA, Wakako

キーワード：メール、配慮、中国人日本語学習者、モデル文

Keywords: Email, Thoughtfulness, Chinese learners of Japanese, Japanese model mails

1. はじめに（背景および目的）

現在、さまざまなツールを使ったテキストコミュニケーションがなされているが、その中で、メールを使ったコミュニケーションは、日本の大学における教師との連絡や、ビジネスにおける対外的な連絡の手段として使用されており、ビジネス日本語でも指導項目として取り入れられる内容である。しかし、メールは、丁寧さなどを表情や身振り等の非言語情報で補うことができないため記述に工夫が必要であり、日本語学習者には習得が難しいことの一つである。そのため、メール文やその指導に関して、これまで様々な研究がなされている。その中で、荻原（2014）は、依頼メール作成課題における推敲時の日本語学習者の書き直しによる変化を分析し、その結果、推敲することで配慮に関わる表現を追加・修正することを示した。しかし、推敲時に見直すべき項目を明示しても適切に修正されない例が見られ、気づいても表現を知らないために修正できない可能性も指摘している。そこで、本研究では、日本語母語話者が書いたモデル文を提示した場合、学習者は何に気づきどのように修正するのかを分析し、モデル文を使った指導の有効性について考察をする。

2. 方法

分析には、中国の大学に在籍中の 25 名の学習者に行った調査データの一部を使用する。内容は、担

任に紹介された面識のない教授に、①講演依頼、②講演の日程調整、③講演へのお礼という一連のメールを書くというものである。上記①と②、②と③の間に日本語母語話者 2 名が書いたメールを見せて気づきを促す授業を行い、その後、メールの書き直しを行っている。本研究では①講演依頼について授業前と授業後のメールを比較し、A 可読性への配慮、B 内容理解への配慮、C 相手へ敬意を示す配慮を主な観点として分析した。

3. 結果および考察

分析の結果、すべてのメールで何らかの配慮の追加が観察された。

まず、A 可読性への配慮についてである。授業前のメールでは、25 名中 20 名の学生が、段落変更時の改行以外は数文を続けて表記している。また、23 名は講演の日時やテーマ等の提示も文章として書き示している。しかし、授業後の書き直しでは、モデル文の書き方を参考にして、一文ごとに改行し（25 名）、さらに、段落間に空行を入れる（21 名）、講演の条件を箇条書きにする（16 名）など、可読性に対する配慮が見られた。

次に B 内容理解への配慮であるが、授業後のメールでは、依頼に至る経緯の説明が簡潔になったり（8 名）、また、明示的な依頼文が追加されたり（依頼分のないメール 4 名中 3 名が依頼文追加）しており、依頼と講演内容の詳細を簡潔に提示したより伝わり

^{※1} 国立国語研究所プロジェクト非常勤研究員

やすい書き方に修正されている。

そして、C 相手への敬意に対する配慮という観点について、まず 1 つ目の変化は、自分の状況や要望を中心とした依頼メールから、相手の都合や状況を踏まえたメールに変化している点である。具体的には、授業前のメールには、前置き表現の使用がなく、相手の都合や状況に配慮していない学習者が見られた (12 名)。また、使用している依頼表現が、「お願いしたいと思います」「講演していただきたいです」のような願望を表す「たい」を使用している上に、諾否を求めることを暗示する言いさし表現ではなく、自身の要望を示す言い切り表現を使っている (13 名)。これらの要因が、相手よりも自分の要望を前面に出して依頼しているような印象を与える要因になっているのではないかと考えられる。しかし、授業後のメールでは、「大変恐縮ですが」「こちらの都合で申し訳ございませんが」などの前置き表現や、「ご講演をお願いできないでしょうか」「講演していただけないでしょうか」のような依頼表現を使って、自分の要望を伝えることに対するお詫びや、相手の都合を考え相手に決定権を示すような表現を追加し、相手への配慮を示す書き方に修正している。

もう 1 つの変化は、自分の言葉で表現された「内容による配慮」が削除されていることである。下記は、授業前のメールには見られたが、授業後のメールでは削除されていた内容である。

「私たちの今使っているある教科書はちょうど〇〇教授の書いた本です。そして、他の学生たちと相談して、みんなも〇〇教授をさそって欲しいです。CCO017」「本当に〇〇先生が今回の講座に参加することが希望しています。CCO004」「〇〇先生の演説をもらえれば心より光栄だと思います。CCO011」
(文末番号は学習者 ID)

これらは、型通りの内容ではなく、相手が望んでいる内容を、表現は未熟であっても学習者自身の言葉で書いた部分である。坂本 (2000) は「相手に対する配慮は、言葉上の配慮より、伝える内容を充実させることでより表されることがある」と述べており、これらも相手への配慮であると言えるが、授業後のメールではこれらが削除されていた。

4. 考察

ここまでの分析で、学習者は依頼のメール文において、モデル文を提示することで A 可読性への配慮、B 内容理解への配慮、C 相手へ敬意を示す配慮について、それぞれに修正が見られることがわかった。香月 (2023) は、留学生が書くメールには、相手の立場に立ち相手がどう受け取るかを考える「相手視点」が欠如していると述べている。今回の分析でも、授業前のメールには「相手視点」の欠如が見られたが、モデル文を使用し気づきを促すことで、可読性や内容理解、前置き表現や依頼表現などに修正がなされ、「相手視点」のメールに近づけることがわかった。依頼メールは文章の構成や表現に典型例があると思われる。それらを効果的に教えるには、モデル文の提示による指導は有効であると考えられる。

しかし、「自身の言葉で伝える内容」が省略されてしまう傾向があることもわかった。相手が望んでいる内容を自身の言葉で表現することは配慮にもつながり、それによって相手に強い印象を与え、依頼を成功させる要因の一つになることがある。このような重要性や効果を学習者に気づかせることも有意なことである。モデル文から参考にとすることと、自分の言葉でどう表現するのかということ、両者を指導していく必要があるであろう。

(w. suga@ninjal.ac.jp)

謝辞

本発表は、国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」の研究成果である。

参考文献

- 1) 香月裕介：留学生がビジネスメールを書くときの問題点-「相手視点」という観点から-，神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学会紀要 8，pp. 93-102 (2013)
- 2) 坂本恵：「敬語表現」の意味するもの，神奈川大学言語研究 22，pp. 73-83 (2000)
- 3) 萩原章子：日本語学習者による E メール作成-書き手中心から読み手中心へ-，早稲田日本語教育実践研究 2，pp. 9-24 (2014)

日本語ビジネス Eメールの読み手が感じる配慮

—日本で勤務する日本語母語話者と非母語話者のビジネスパーソンへの調査から—

The Consideration felt by readers of Japanese business emails:

Based on a survey of native and non-native Japanese speakers working in Japan

横川 未奈^{※1}

YOKOGAWA, Mina

キーワード：ビジネス日本語教育、ビジネス・コミュニケーション、ビジネス Eメール、読み手、配慮
Keywords: business Japanese, business communication, business email, reader, consideration

1. 本研究の背景と目的

ビジネス Eメールのやり取りでは利害関係が働く上にパラ言語・非言語行動の伝達ができないため配慮を示すことが重要となる¹⁾。しかし、配慮の示し方は言語や文化によって異なるため日本語母語話者・非母語話者間で誤解や問題が生じることがある²⁾。日本語ビジネス Eメール（以下、BJ メール）の配慮に関しては、社会人の読み手に調査を行った研究が僅かであり、日本語母語話者と非母語話者のビジネスパーソン（以下、JBP と NNBP）が BJ メールを読んだ際の配慮の感じ方は調査されていない。日本における外国人労働者数は近年増加の一途を辿っている³⁾ため、JBP・NNBP 間での BJ メール通信の機会も増加が見込まれる。以上から、ビジネス日本語教育に還元可能な両者の相互理解に役立つ示唆を得るためには、JBP と NNBP への調査をさらに行う必要がある。そこで本研究では、JBP と NNBP は互いが作成した BJ メール中の何に配慮を感じているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

調査協力者は機縁法で募集し、20 代前半～30 代前半で、日本での勤務年数が 1 年以上 5 年未満の JBP 5 名・NNBP 5 名の協力を得た。所属業界は IT が 4 名、サービス・小売が各 2 名、金融・製造が各 1 名である。NNBP の母語は、幼少期に養育者から習得した言語として尋ねた結果、台湾華語、台湾華語と中国語、台湾華語と日本語^{注1}、韓国語、広東語が各 1 名であった。調査期間は 2023 年 10 月下旬～

11 月上旬で、調査では「昨日、社外の人と初めての打ち合わせを予定していたが、相手会社都合で取り止めになり電話で謝罪を受けた。本日、打ち合わせ再調整依頼の BJ メールが届いた」と設定を示した。

JBP には NNBP、NNBP には JBP が作成した 3 つの BJ メール^{注2}の配慮度評価を 4 件法（大変配慮があると感じる=4、やや配慮があると感じる=3、配慮があるとはあまり感じない=2、配慮があるとは全く感じない=1）で依頼し、評価理由と「より配慮がある BJ メールにするための変更箇所」を半構造化インタビューで尋ねた。分析は加順⁴⁾を援用し、変更箇所の指摘を読み手の違和感であると捉え、その内容を過剰・不足・表現・表記に分類した^{注3}。

3. 結果および考察

3. 1 NNBP の BJ メールに対する JBP の評価

NNBP が作成した BJ メール（以下①②③）に対する JBP の配慮度評価の平均値は、①が 2.2、②が 3.6、③が 3 であった。最も評価が高い②は、用件部分の談話展開が【謝罪】→【依頼】→【謝罪】であり、次回打ち合わせの＜候補日時の提示＞がある。次点の③は、談話展開が【感謝】→【依頼】→【謝罪】で、②と同様に＜候補日時の提示＞がある。最も評価が低い①は、談話展開が【謝罪】→【連絡理由】→【依頼】であり、＜候補日時の提示＞は無い。

①は、JBP 全員が次回打ち合わせの候補日時が無いことが「不足」で、理由は、やり取りの回数が増えるためであるとし、業務効率を重視する考えが見られた。そのため、本研究の JBP は、やり取りが少なく効率的に業務が進められる BJ メールを特に配

^{※1} 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

慮があると捉えていた。ただし、③は候補日時の記載はあるものの配慮度評価は4が2名、3が2名、1が1名となり、評価が分かれた。1と回答したJBPは【謝罪】の構成要素が用件部分の始めに無いためビジネス場面の言語行動の規範に沿っていないことや、候補日時提示箇所の表記ずれ等を指摘していた。

JBPからは違和感を指摘する際に、言語使用上の個人的な好悪の感覚や、所属企業における言語使用・言語行動の規範、指導・指摘を受けた経験等、複数の理由が言及された。そのため、それらの要因が配慮度評価に影響を与えていると考えられる。

3. 2 JBPのBJメールに対するNNBPの評価

JBPが作成したBJメール（以下④⑤⑥）に対するNNBPの配慮度評価の平均値は④・⑤が2.6、⑥が3.8であった。最も評価が高い⑥は、談話展開が【謝罪】→【依頼】で次回打ち合わせの＜候補日時の提示＞は無い。JBPによる配慮度評価では、＜候補日時の提示＞が無い①のBJメールが最も配慮が感じられにくく、JBP全員から候補日時が「不足」と指摘されていた。一方、NNBP側では次回打ち合わせの候補日時が無い⑥が、謝罪の意が伝わるという理由から候補日時がある④・⑤より高く評価されていた。これについては1名のNNBPより以下の回答が出されたため、NNBPの場合、学習経験に基づくビジネス日本語のビリーフが評価に影響していると考えられる。ただし1名のNNBPのみ⑥は＜候補日時の提示＞が「不足」と指摘していた。

【⑥についてのNNBPの発言】これ、このメールを見ると、よく私グーグル、グーグルで見た感じ、見た例文の感じがあります。そうそう。だからこれは、うん、いいと思いますね。丁寧とか礼儀正しいとか。だから、例文レベルであれば、多分、相手の（筆者注：相手への）配慮が1番強いかなと思います。

④・⑤は配慮度評価の平均値は同じであるが、④の配慮度評価は4が1名、3が2名、2が1名、1が1名で評価が割れた。2名のNNBPが＜候補日時の提示＞が「過剰」と述べて一方、1名のNNBPは＜候補日時の提示＞にも配慮が感じられると述べていた。また、⑤は3が3名、2が2名で

あり、配慮を感じるという評価がやや多かった。

4. 結論と今後の課題

以上、JBPは次回打ち合わせの候補日時の提示があるBJメールを業務効率が良く配慮が感じられると評価し、NNBPは候補日時の提示が無いBJメールを謝罪の意が伝わり配慮が感じられると評価する傾向にあった。しかし、個人の配慮の感じ方の違いからJBP内・NNBP内で評価が割れる場合もあった。配慮の捉え方の多様性の背景には、業界・企業の慣習等の言語に反映される種々の文化や、各人がビジネス経験から得た知見があると考えられるため、日本語母語話者と非母語話者の相互理解には両者の共修により多様な配慮の示し方や受け止め方に対する寛容な姿勢を形成することが望ましいと考える。

今後の課題は、BJメールの配慮度評価に影響を与える要因をより具体的に明らかにすることである。

(mina_8_21@yahoo.co.jp)

注

- 注1 母親が日本留学経験者で、台湾にて主に母親から日本語を学んだため日本語も母語であると回答があった。
注2 横川(2023)の調査で得たBJメールから抽出した。
注3 加順⁴⁾の分類項目に「表現」と「表記」を加えた。

参考文献

- 1) 横川未奈：日本語ビジネスEメールの構成・内容に見られる日本語母語話者・非母語話者の配慮言語行動一日程再調整のビジネスEメールを事例に一、日本語教育, 第185号, pp.77-92 (2023)
- 2) 清水崇文：コミュニケーション能力を伸ばす授業づくりー日本語教師のための語用論的指導の手引きー, スリーエーネットワーク (2018)
- 3) 厚生労働省：「外国人雇用状況」の届出状況まとめ【本文】(令和4年10月末現在) (2023)
<https://www.mhlw.go.jp/content/11655000/001044543.pdf>, 2024.1.12 閲覧
- 4) 加順咲帆：配慮の言語行動における地域的志向ー話者の内省を手掛かりに一、日本語学会春季大会予稿集, pp.85-90 (2023)

自動車整備士養成教科書の基礎的語彙調査

— 語数・語種・重要語・コロケーションの観点から —

A Basic Survey on the Vocabulary of Automotive Mechanic Training Textbooks:

Number of Words, Lexical Strata, Important Words, and Collocations

日暮 康晴^{※1}

HIGURE, Yasuharu

キーワード：自動車整備、教科書分析、語彙、語種、コロケーション

Keywords: auto mechanic, analysis of textbooks, vocabulary, lexical strata, collocation

1. はじめに（背景および目的）

自動車整備業の技能実習・特定技能での受入開始など、日本語非母語話者（以下、学習者）と自動車整備業の関わりが増す現在、自動車整備業や整備士養成に関する専門日本語教育的研究もまた急務であるといえる。本研究は、特に自動車整備士の養成段階に注目し、その中で使用される自動車整備士養成教科書（以下、教科書）の調査を行ったものである。先行研究には教科書・試験内の漢字語彙に注目した佐野（2021）、和語に注目した清水（2020）など特定の語群に注目した調査等は既にあるが、教科書全体の特徴に注目して行われた全体的・総合的な調査は管見の限りない。本研究は基礎的調査として、教科書全体の特徴を明らかにすることを目指す。具体的には、語数・語種・重要語・コロケーションに焦点を当て、これらの要素にみられる特徴を明らかにし、学習・指導の中での注意点などをまとめる。

2. 方法

調査対象には、自動車整備士養成課程において広く使用される教科書である『基礎自動車工学』、『基礎自動車整備作業』、『三級自動車シャシ』、『三級自動車ガソリン・エンジン』、『三級自動車ジーゼル・エンジン』（いずれも日本自動車整備振興会連合会編集。以下、順に『工学』、『整備』、『シャシ』、『ガソリン』、『ジーゼル』）を選出した。

調査の前段階として、各教科書本文の書き起こし

を行い、そのデータに対し KH Coder を使用して教科書別に延べ語数および異なり語数を計測した。さらに、異なり語数を述べ語数で割ることによって、語彙の豊富さを表す指標である Type-token ratio（TTR）を求め、教科書間で比較を行った。

語種情報については、同書き起こしデータに対しオンライン形態素解析ツール「web 茶まめ」を使用して各教科書本文の形態素解析を行い、語種情報を集計した。教科書の特徴を明らかにするため、語種情報を『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）の語種情報（BCCWJ 語種構成表）と比較した。

重要語は、各教科書の中で登場頻度が高い語を 30 語ずつ、KH Coder を用いて選出した。さらに、選出された語には教科書内頻度 1 位であれば 30 点、2 位には 29 点……30 位には 1 点という重み付けを施し、5 冊分の結果を合わせることによって教科書全体の中での重要語として総合的な結果を得た。さらに、その結果得られた語に対し品詞・語種の分布および難易度を確認した。難易度を確認には「日本語教育語彙表 Ver. 1.0」（日本語学習辞書支援グループ 2015）内の「語彙の難易度」情報および「リーディング・チュウ太」の語彙レベル判定機能を使用した。

最後に、各教科書のコロケーション情報について、各教科書の書き起こしデータを元に KH Coder による共起ネットワーク作成を行い、各教科書内の語の共起関係を整理した。

3. 結果および考察

まず、語数についてまとめる。延べ語数・異なり

^{※1}筑波大学人文社会科学研究群博士後期課程

語数は教科書によって異なるが、TTR に注目すると0.1強の『工学』、『整備』と、0.06前後の『シャシ』、『ガソリン』、『ジーゼル』の2グループにまとめられる。前者のグループの方が後者に比べ語彙が豊富であるとまとめられるが、これは、後者は教科書全体のテーマがある程度限定されていることに対し、前者はより広範なテーマ・内容を含んでいることが影響していると考えられる。

語種について、5冊全体の中での和語・漢語・外来語・混種語の4語種の比率は和語58.8%、漢語28.4%、外来語12.2%、混種語0.6%であった。教科書別に見ても、5冊の間で大きな違いはない。BCCWJとの比較では、調査対象教科書の特徴には漢語・外来語の割合の高さが挙げられる。

次に、重要語についてまとめる。各教科書より抽出し整理した結果、重要語には83語が認められた。83語の品詞の内訳は名詞が75語、動詞が1語、形容詞が1語であった。また、重要語のうち和語は14語、漢語は43語、外来語は26語であった。漢語の43語、外来語の26語はすべて名詞であり、ここからは、重要語としての漢語名詞・外来語名詞の比重の高さが定量的に認められたといえる。また、重要語のレベルを分類したところ、「語彙表」基準では初級が5語、中級は45語、上級は19語、掲載なしが14語、「チュウ太」基準ではJLPTのN5レベルが4語、N4レベルが6語、N2N3レベルが32語、N1レベルが14語、級外レベルが27語であった。これらの結果をまとめると、中級・N2N3以上が重要語のほぼ全てを占めており、これらの教科書の語彙的な側面からの難易度は比較的高いことが示された。

コロケーションの分析結果からはエンジンなどの自動車の構造や、電装、点検修理などのテーマによって結びついていることが明らかになった。ここからは、語彙のコロケーションを意識して学習を行うことが語彙学習の効率だけでなく自動車整備そのものへの理解にも好影響を及ぼす可能性が示唆された。

4. おわりに

本研究では5冊の自動車整備士養成教科書を対象に、その語彙に関する特徴をまとめた。これらの教

科書では概して漢語・外来語名詞の比重が高く、また、難易度も難しい傾向にある。学習者がそれまでの一般的な日本語学習の中で触れてきた日本語とは異なること、また、専門日本語的観点からのサポートの重要性が示唆された。先述したように、既に特定の語種などに注目した調査研究も行われているものの、本研究によって、あらためてそれらの背景となる教材の基礎的な情報を整理することができた。今後は、教材・試験に限らず、実際の実習や就業場面などの調査も含め、自動車整備に関わる日本語の実態を様々な視点から明らかにしていきたい。

(figure.j@gmail.com)

資料

- 1) 一般社団法人日本自動車整備振興会連合会編: 三級自動車ジーゼル・エンジン (2020)
- 2) 一般社団法人日本自動車整備振興会連合会編: 基礎自動車工学 (2021)
- 3) 一般社団法人日本自動車整備振興会連合会編: 基礎自動車整備作業 (2021)
- 4) 一般社団法人日本自動車整備振興会連合会編: 三級自動車ガソリン・エンジン (2021)
- 5) 一般社団法人日本自動車整備振興会連合会編: 三級自動車シャシ (2021)
- 6) 日本語学習辞書支援グループ: 日本語教育語彙表 (Ver.1.0) (2015)
<http://jhlee.sakura.ne.jp/JEL.html> (2023.8.15 取得)
- 7) 国立国語研究所: BCCWJ 語種構成表 (Version 1.1)
<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/bcc-chu.html>
(2023.11.17 取得)

参考文献・Web サイト

- 1) Web 茶まめ
<https://chamame.ninjal.ac.jp/> (2024.1.27 閲覧)
- 2) 佐野正子: 自動車整備専門学校における二字漢字語学習の効率化に関する一考察—「複合名詞」中の二字漢字語の学習優先順位—, 一橋日本語教育研究, 9, pp.15-29 (2021)
- 3) 清水勝昭: 自動車整備の教科書に見られる和語語彙—外国人留学生への指導の観点から—, 中日本自動車短期大学論叢, 51, pp.49-70 (2020)
- 4) 日本語読解学習支援システム リーディング・チュウ太
<https://chuta.cegloc.tsukuba.ac.jp/> (2024.1.27 閲覧)

中国中等教育におけるコロケーションによる語彙教育

—中国語の知識を直接利用できる「名詞＋を＋和語動詞」に着目して—

Vocabulary Education by Collocations in Chinese Secondary Education: Focusing on "Noun +wo + Japanese Verbs" that Can Be Used Directly to Knowledge of Chinese

崔 皓^{※1}

CUI HAO

キーワード：中国の日本語中等教育、コロケーション教育、母語の活用

Keywords: Japanese Secondary Education in China, Collocation Education, Utilization of Mother Tongue

1. はじめに（背景および目的）

コロケーションは自然な日本語の表現に欠かせない要素であり、コロケーションの学習は、一語一語暗記する方法より効果的な教育につながると考えられる。しかし、中国語母語話者の日本語学習者にとってその習得が非常に困難である。劉（2017；2018）は、上級になってもコロケーションは難しく、母語の影響を強く受けるとしている。一方、松下（2005）は中国系の年少者を対象に、「中国語知識直接利用可能語彙」一覧表を作り、母語を活かす提案をしている。中国人学習者が、日本語コロケーション習得において、母語を活かす教育は、有効であると考えられる。しかし、中国中等教育におけるコロケーションの習得研究はあまり見られない。

そこで、本研究では、中国人高校生を対象とし、中国の日本語中等教育におけるコロケーションの習得を調査し、効果的な学習方法を検討することを目的とする。

2. 方法

協力者は日本語を学習する中国人高校生であり、日本語レベルはN4程度、日本語テストにより上位群と下位群にわけた。

研究手順は、まず、中国語の和語動詞とコロケーションを日本語に翻訳させるテストを行い、統計処理を行っ

た。テストの採点后、誤用の原因を明らかにするために、フォローアップインタビューを実施した。さらに、コロケーションの指導法について、高校の日本語教師にインタビューを実施した。

問題例：

和語動詞テスト 放入→_____（正解例：入れる）

コロケーションテスト 放入材料→_____

（正解例：材料を入れる）

3. 結果および考察

本研究の結果は以下の5点でまとめられている。

①初級の中国語を母語とする日本語学習者は日本語習熟度が高くなるにつれて、和語動詞もコロケーションもより正確に使用できることが確認された。そして、和語動詞の習熟度が高くなるにつれて、コロケーションをより正確に使用できることが確認された。

②初級の中国語を母語とする日本語学習者にとって、中国語の知識が直接利用できる名詞は活性化する前に、コロケーションの理解や共起可能性の判断に負担をかけることが明らかになった。しかし、日本語習熟度が高くなるにつれて、その負担が「手がかり」に変わる傾向が見られる。言い換えれば、「中国語知識直接利用可能語彙」は、習得が難しい語彙の回想の段階で手がかりとして機能することの前提は、その中国語の知識を直接利用できる名詞が既に活性化されたことであると考えられる。

③本研究では、和語動詞の誤用には、漢字に影響される誤用がもっとも多いことが示され（例：「上げる」→*「上る」）、初級の学習者には日中両言語に共通する漢字の影

※1 立命館大学言語教育情報研究科修士課程

響が強いことが示唆されている。これは、和語動詞の習得において漢字共有の有無の影響を強く受けているのは下位群だったということを明らかにした黄他 (2019) の結果と一致している。そして、特に日本語の自動詞と他動詞が同じ中国語訳になるパターン (例: [降低] → 「下がる」「下げる」) に対して、訳語の影響で混同しやすいため、コロケーションを丸ごと暗記すべきだと考えられている。

④名詞に中国語の知識を直接利用できる「名詞+を+和語動詞」型コロケーションの誤用には、動詞によるものももっとも多く (例: 「温度を下げる」→「*温度をふる」)、劉 (2018) と一致した結果である。そして、共起する語彙がわからないことによる誤用が二番目に多いため、コロケーションを指導することで、名詞と動詞の意味・用法をきちんと理解させることが大切であることが示唆された。

⑤中等教育段階で、コロケーションの指導は、説明においてもテストにおいても、訳語レベルに留まらず、学習者が深く理解できるように教えることが望ましいと示唆した。

以上の結果を踏まえ、中等教育における日本語コロケーションの指導への示唆について考えたい。

まず、受験競争が激しい中等教育において、コロケーションを導入する前に、導入に値するかどうかということと学習負荷の高低を考慮する必要があると考えられる。たとえば、中国語の知識を直接利用できる名詞は指導と習得の負荷が低いため、中国語の知識を直接利用できる名詞を明示的に学習させており、それを手がかりとし、他の単語とのコロケーションの習得に機能するはずである。また和語動詞は重要で難しい学習項目であるため、中国語の知識を直接に利用できる名詞と和語動詞のコロケーションは導入に値すると考える。

そして、コロケーションは語彙の意味と用法の知識に関わっているため、その指導は訳語のレベルに留まらず、日中の両言語間の違いを明確に区別させるべきである。学習者のコロケーションの誤用を指摘する際、説明に留まらず、定着するための練習も必要であると考えられる。また、意図的学習させた上で、付随的学習も適当に入れれば、理想的なのではないかと考えられる。

最後に、中国での中等教育においては、非母語話者教師が中核的存在である。非母語話者教師は母語話者のように、コロケーションの自然さについて直感を持つことが

難しいため、学習者が産出したコロケーションに十分な注意を払い、辞書とコロケーションを利用し確認する必要があると考える。

4. おわりに

本研究では、中国人高校生を対象とし、和語動詞テストとコロケーションテストを実施した。その結果、①日本語習熟度が高くなるにつれて、和語動詞もコロケーションもより正確に翻訳された。また、下位群でのみ、和語動詞の点数がコロケーションの点数より有意に高かった。②「名詞+を+和語動詞」型コロケーションの誤用には、動詞による誤用がもっとも多く、次に共起による誤用が多かった。以上の結果を踏まえ、高校生にフォローアップインタビューとアンケートを実施し、教員にインタビューすることで、中国の日本語中等教育の現場を考察し、コロケーションの指導は、説明においてもテストにおいても、訳語レベルに留まらず、学習者が深く理解できるように学習させることが望ましいと提案した。

(メールアドレス:cuihao19980911@gmail.com)

注

注1 コロケーション:よく一緒に使う単語の組み合わせ、自然な語のつながりである。本研究では、連語とも自由結合ともコロケーションとして扱う。

参考文献

- 1) 黄叢叢・玉岡賀津雄・小森和子・母育新: 中国人日本語学習者による連語習得に関わる背景要因, 小出記念日本語教育研究会 27, pp. 53-67 (2019)
- 2) 松下達彦: 語彙学習先行モジュールの日中バイリンガル児童・生徒への応用: 母語の漢字知識を活かす, 母語・継承語・バイリンガル教育 (MIB) 研究 1, pp. 84-95 (2005)
- 3) 劉瑞利: 日本語学習者の『名詞+動詞』コロケーションの使用と日本語能力との関係—『YNU 書き言葉コーパス』の分析を通して—, 日本語教育 166, pp. 62-76 (2017)
- 4) 劉瑞利: 中国語を母語とする上級日本語学習者の「名詞+動詞」コロケーションの使用—日本語母語話者との使用上の違い及び母語の影響, 日本語教育 169, pp. 31-45 (2018)

ベトナム語母語話者における漢越語の 意味把握に関する基礎調査

—日本語教育・学習への応用を目指して—

A Basic Research on the Comprehension of Sino-Vietnamese Words among Native Vietnamese Speakers:
Aiming for Application to Japanese Language Education and Learning

道上 史絵^{*1} 天野 裕子^{*2} Trần Quốc Hiệp^{*3} 比留間 洋一^{*4}
MICHIGAMI, Fumie AMANO, Yuko Tran Quoc Hiep HIRUMA, Yoichi

キーワード：漢越語、日越共通二字漢字語

Keywords: Sino-Vietnamese word, Japanese-Vietnamese isomorphic two-letter kanji word

1. はじめに

現代ベトナム語（以下越語とする）には語彙の中に漢語起源の語（漢越語）が意味や音声の類似性を残したまま保存されている。日本語教育では、これが越語母語話者の漢字教育・学習に利用可能であるとされてきた（Phan, 2006; 松田ほか, 2008）。松田ほか（2008）は、漢越語の日本語教育への応用には意味と音声それぞれの類似性の検証、書字の知識、認知的経路について明らかにする必要があるとする（p.26）。本研究はその中で両言語間の意味の類似性に焦点を当てる。

松田ほか（2008）は、旧日本語能力試験出題語彙の中にある二字漢字語を対象に漢越語との対照を行い、同文字^{※1}・同意義である語（以下AB/ABとする）が1331語あり、それが二級語彙に多く含まれることを明らかにし、越語母語話者にとって漢越語知識が有利に働くのは中級以降であると述べた。しかし学習ストラテジーに着目した研究では、中級以上で漢越語の利用が避けられるケースがあることや、漢越語を学習に利用できない学習者がいることも明らかとなっている（天野, 2021; ファンほか, 2021）。意味の類似性の利用法として漢字学習負担の軽減、新出語への対応（意味推測）などが考えられるが、そのためには学習者が漢越語の意味を知っていること、日本語と同義で把握している

ことなどが前提となる。しかし先行研究は語義の対照に留まり、学習当事者の越語使用実態に焦点を当てた調査はなされていない。よって本研究では、越語母語話者における漢越語の意味把握の実態調査を行った。

2. 方法

本研究は全体として語の親密度調査（調査1）、意味再現調査Ⅰ（調査2：質的調査）、意味再現調査Ⅱ（調査3：量的調査）を設定し、2023年10月現在調査2まで終えている。本発表は調査2について述べる。

調査1では、まず松田ほか（2008）でAB/ABとされた1331語の中でその意味を表す他の語が存在しない、つまり最も一致度が高いと考えられる764語を対象とした。調査2ではその中から親密度の高い順、低い順に10%ずつ、計152語を抽出し、約15語ずつランダムに並べた質問紙を10種類用意した。質問紙の指示文は「その語を直接使わずに意味を説明してください」とし、知識を評価するための調査ではなく、回答は推測で書いて構わないことを付記した。

調査は2023年9月にハノイで、送り出し機関Aの在籍者23人とB大学（日本語専攻1年生）の在籍者7人の協力を得て実施した。Aの協力者は日本語学習歴3か月未満、Bは1か月未満であった。漢字学習の経験はAの協力者4人を除きほぼ無かった^{※2}。第一発表者がインフォームド・コンセントと調査説明を行った後、質問紙への記入を開始した。一人1～3枚記入してもらい、1語につき7～8の回答を得た。

^{*1} 立命館大学理工学部准教授

^{*2} 沖縄大学人文学部国際コミュニケーション学科講師

^{*3} 大阪大学大学院人文学研究科博士後期課程

^{*4} 静岡大学国際連携推進機構特任准教授

3. 結果および考察

発表者全員で回答の分析を行い、日本語と異なる意味が再現され、かつそれが偶発的なものではないと判断した語を表1に示す^{注3}。異なりには1) 越語の本来の意味とは異なるが日常の使用文脈に影響を受ける(雑貨、赤道など)、2) 両言語で意味が重ならない部分が想起される(開通、加味など)、3) 語を知らない(上旬、農薬など)のパターンが見られた。これらは、ずれがある場合1)、2)と知らない場合3)に分けられる。前者でずれが大きいものは学習への即時利用は難しい。後者の場合、知らない原因として語が古く使用されない、他の表現が一般的に用いられる、身近ではないなどが考えられるが、二字のいずれかを頼りに推測を行うことになり、結果的に誤った意味が再現される。推測を困難にする要因の一つが、現在越語の文字表記において漢字が使用されていないことだと考えられる。同音異義語で漢越語と純越語^{注4}の区別が難しい場合があり(Trần, 2015)、同表記の語では多様な解釈が可能となる。それが推測をより困難にする。

以上のように松田ほか(2008)で利用可能性が最も高いと考えられた語の中にも、越語母語話者側から見ると日本語と異なる意味が把握されている語や、知らない語が存在する。両言語間の辞書上の語義の一致だけでは越語母語話者の漢字語教育・学習に漢越語が利用可能とは言えない。学習者の言語使用実態に即したより細やかな調査が今後も必要であると言えよう。

4. おわりに

本調査では越語母語話者の漢越語の使用実態の一部を明らかにした。しかし調査範囲が限られているため、調査3において更に量的な調査を行う必要がある。また、本調査の結果は本調査の協力者のような日本語能力試験を受験する必要がある学習者への貢献が想定される。しかし今後は他方面への展開も可能であると考えられる。例えば介護福祉士国家試験出題語彙においても日越同文字・同意義の漢字語が多く含まれることが指摘されている(Phanほか, 2023)。それらを今後の課題としたい。

(メールアドレス michi-f@fc.ritsumei.ac.jp)

表1 異なる意味が再現された語

高親密度語	雑貨、労働、圧力、加味、産出、規模、地位、安静、指揮、保管
低親密度語	赤道、年代、最高、部首、専制、神聖、寒帯、私有、海流、否決、内閣、反対、流域、政党、立体、開通、眼科、上旬、中旬、下旬、風土、内線、農薬、年鑑、振興、正当

注

注1 現代越語では漢字を使用しないが、ここでは漢字で表した場合に同文字を使用するというを表す。

注2 Aの協力者4人以外は漢字学習を開始していないか、もしくは漢数字などを学んだのみだった。

注3 厳密には両言語間に品詞等の相違があるが、本調査では意味の面に着目した。

注4 純越語とは、出自を問わずに、越語母語話者が共時感覚で固有語と認識し、越語の基礎語彙をなしている語を指す。

参考文献

- 1) 天野裕子：ベトナム語母語話者の日本語語彙学習ストラテジーに関する基礎研究，九州大学博士論文（2021）
- 2) Phan Thi My Loan：ベトナム人日本語学習者に対する効果的漢字指導法，大阪外国語大学博士論文（2006）
- 3) Phan Thi My Loan・道上史絵・比留間洋一：ベトナム人中上級日本語学習者の漢字習得における漢越語利用一介護福祉士国家試験対策の考案に向けた基礎研究一，外国語教育のフロンティア, 5, pp.55-71（2022）
- 4) Phan Thi My Loan・佐々木良造・比留間洋一・道上史絵：介護福祉士国家試験出現漢字語彙のなかの漢越語に関する基礎調査，外国語教育のフロンティア, 6, pp.91-105（2023）
- 5) 松田真希子・タン ティ キム テュエン・ゴ ミン トウイ・金村久美・中平勝子・三上喜貴：ベトナム語母語話者にとって漢越語は日本語学習にどの程度有利に働くか一日越漢字語の一致度に基づく分析一，世界の日本語教育, 18, pp.21-33（2008）
- 6) Trần Thị Kim Anh. : Khả năng nhận biết và xu hướng sử dụng từ Hán Việt của học sinh-sinh viên (学生の漢越語認識能力と使用傾向), Tạp chí Phát triển KH&CN, Tập 18, Số X2-2015, pp.5-15（2015）

大学入学直後の「経済の基礎的専門語」の習得状況

—ベトナム人留学生と韓国人留学生を中心に—

Acquisition of "Fundamental Economics Vocabulary for International Students"

Immediately After Entering University:

With a Focus on Vietnamese and Korean Students

○重田 美咲^{※1} 中原 郷子^{※2} 竹中 知華子^{※3}

SHIGETA, Misaki NAKAHARA, Satoko TAKENAKA, Chikako

キーワード：経済の基礎的専門語，ベトナム人留学生，韓国人留学生，初年次教育

Keywords: Fundamental Economics Vocabulary, Vietnamese, Korean, First year

1. はじめに

大学における日本語教育では、日本語能力を伸ばすとともに専門について学ぶための知識や技能を身につけることも望まれる。経済学部において、日本人学生は初等・中等教育の社会科で学んだ知識をもとに学ぶことができるが、留学生が日本人学生と同様の知識を持っているとは限らない。また、出身国によって留学生の持つ知識が異なる可能性もある。これらを把握できれば、初年次の日本語教育や専門教育をより効果的に行うことができると考えた。筆者らはこれまで、留学生の中で最も多い中国人学生と日本人学生の比較を通して、経済を学ぶためのレディネスに関する調査を行ってきた（重田・中原・森 2016, 重田・中原・森 2017）。本研究では、中国に次いで多いベトナム人学生や韓国人学生に着目した。

2. 方法

大学入学直後の韓国人留学生 7 人、ベトナム人留学生 6 人に対して探索的に調査を行った。調査協力者の日本語能力は全員上級レベルで、全員、初等・中等教育を母国でのみ受けている。本研究では、小宮（2014）の「留学生のための経済の基礎的専門語（以下、基礎的専門語）」を用いた。日本語で書かれた基礎的専門語を見て、その概念がどの程度理解できているかを 7

段階のリッカート法で自己評価をすることで理解度を測った。加えて、漢字の読み方を平仮名で書くことも依頼した。その結果を日本人学生や中国人学生の調査結果（重田・中原・森 2016）と比較し、考察した。

3. 結果および考察

3.1 理解度

まず、理解度の低い語彙（下位30位）に着目したところ、中国人学生（以下、C）、日本人学生（以下、J）、ベトナム人学生（以下、V）の順にカタカナ語が多く、最もカタカナ語が少ないのは韓国人学生（以下、K）であった。加えて、Kの理解度の低い語彙には、カタカナの複合語は見られなかったが、J、V、Cにおいては、少なからず見られた。次に、理解度の高い語彙（上位30位）に着目してみると、K、J、V、Cの順にカタカナ語が多かった。また、C、Vでは二字漢語が半数以上を占めるが、Kでは2語のみであった。これらのことから、Kは、他と傾向が異なること、カタカナ語の基礎的専門語の習得状況が良いことが窺える。

さらに、理解度の低い語彙（下位 30 位まで 4 カ国分、異なり語数 73 語）に着目し、どの国とどの国との組み合わせが多いのかを分析した（表 1）。日本人が大多数となる専門の授業を想定し、まず J を中心に分析した。J、C、V、K に共通しているものはカタカナ語 3 語のみであった。K にも難しいカタカナ語があることが指摘できる。最も多いのは J、C、V に共通する 11 語で、すべてカナカナを含む語であった。次に多いのは、J、K に共通する 5 語だ

※1 広島市立大学国際学部准教授

※2 長崎外国語大学外国語学部准教授

※3 西日本工業大学デザイン学部准教授

が、こちらにはカタカナは含まれない。一方で、J を含まず、C と V、K と V のみにとっての理解度の低い語もある。C と V に共通するのはほとんどがカタカナ語であるのに対し、K と V に共通する語は漢語であった。なお、C と K に共通する語はなかった。

また、経済学の観点からも理解度についての分析を行ったが、特徴等は見られなかった。

以上より、留学生にとって理解しにくい語の多くは日本人学生にとっても理解しにくい語であり、専門の授業において十分な解説がなされれば、留学生の基礎的専門語の習得も促されると考えられる。しかし、留学生のみで理解度が低い語も少なからず存在し、それらは日本語教育において強化されることが望ましいだろう。V にとって理解度の低い語には、C や K の理解度の低い語が含まれるため、V が受講している場合は、V が十分に理解できるように指導すれば、クラス全体の基礎的専門語の習得が進むだろう。しかし、受講者が K だけの場合は漢語に、C だけの場合はカタカナ語に重点を置いたほうが効果的な指導ができると考えられる。

3.2 漢字の読み

漢字の読みで正答者がなかった語は、V で「特別

国	数	内訳
J,C,V,K	3	コングロマリット, ディスクロージャー, メセナ
J,C,V	11	ウルグアイ・ラウンド, コーポレート・ガバナンス, シャウプ勧告, セーフガード, トラスト, ビルトイン・スタビライザー, ファンダメンタルズ, フィスカル・ポリシー, プレトン・ウッズ協定, ポリシー・ミックス, マネー・サプライ
J,C,K	2	グリーンGDP, 経済のソフト化
J,C	3	特別引出権, フロー, マーストリヒト条約
J,K	5	7か国財務相・中央銀行総裁会議, 斡旋, 拡大再生産, 第二の予算, 日米構造協議
C,V	7	カルテル, クーリング・オフ, コンツェルン, スタグフレーション, プライス・リーダー, ペレストロイカ, 四日市ぜんそく
V,K	2	基軸通貨, 仲裁

引出権, 7か国財務相・中央銀行総裁会議, 水俣病, 新潟水俣病, 四日市ぜんそく」, K で「斡旋, 価格の下方硬直性, 寡占, 基軸通貨, 均衡価格, 公衆衛生, 国債依存度, シャウプ勧告, 7か国財務相・中央銀行総裁会議, 水俣病, 新潟水俣病, 持株会社, 累進課税制度」であった。「7か国財務相・中央銀行総裁会議, 水俣病, 新潟水俣病」は K, V で共通している。濁音や長音, 地名の読み方が難しいことが窺える。また、V で「新潟水俣病, 四日市ぜんそく」, K で「斡旋, 寡占, 基軸通貨, 7か国財務相・中央銀行総裁会議」は、漢字の読みだけではなく理解度も低い語であり、このような語は日本語教育においても、専門教育においても、漢字の読みを含めて丁寧に指導していく必要がある。

4. おわりに

本研究では、V, K にとって難しい基礎的専門語が具体的に明らかになった。そして、K の習得状況が他と異なる傾向にあること、特にカタカナ語が学習効果の鍵となることを明らかにした。これらの結果を踏まえたコース・デザインや指導がなされれば、専門の授業も、日本語の授業も、より効果的に展開することができるだろう。

(shigteta-m@hiroshima-cu. ac. jp)

参考文献

- 1) 小宮千鶴子：留学生のための経済の基礎的専門語，早稲田日本語研究，23号，pp.1-12（2014）
- 2) 重田美咲・中原郷子・森邦恵：「留学生のための経済の基礎的専門語」習得に関する一考察—大学入学直後の日本人学生と中国人留学生を比較して—，下関市立大学論集，59巻3号，pp.127-138（2016）
- 3) 重田美咲・中原郷子・森邦恵：経済学を学ぶためのレディネスに関する一考察—大学入学直後の日本人学生と中国人留学生を比較して—，下関市立大学論集，60巻3号，pp.153-160（2017）

謝辞：「留学生のための経済の基礎的専門語」を使わせてくださった小宮千鶴子先生と調査協力者の皆様に心よりお礼申し上げます。

理工系大学院における英語プログラムの留学生の 日本語学習の位置づけとその意義

ーキャリア形成を視野にー

Towards Career Development: The Role and Significance of Japanese Learning for International Students
in English Programs at Science and Engineering Graduate Schools

○卓 妍秀^{*1} 村岡 貴子^{*2} 福良 直子^{*3} 和嶋 雄一郎^{*4}
TAK, Yon-Soo MURAOKA, Takako FUKURA, Naoko WAJIMA, Yuichiro

キーワード：英語プログラム、理工系大学院留学生、日本語教育、キャリア形成

Keywords: English-taught Program, International Student in Science and Engineering, Japanese Learning, Career Development

1. 研究の背景および目的

日本の大学における英語による授業等で学位取得が可能な英語プログラム（以下、英語プログラム）は、日本語を母語としない留学生が英語のみで学術活動を行う選択肢を広げる一方で、日本語学習が課せられていないために生じる課題も指摘されている。

理工系大学院における留学生の言語使用に関する先行研究は、研究活動における英語の優位性と、研究以外の場面での日本語の使用という、二つの側面の存在を指摘している。深川・高嶋（2017）は、留学生が日常生活においてローカルコミュニティとの交流時に日本語使用の必要性が高いことを示した。

一方で、重田（2008）は、留学生が研究室の慣習と人間関係の複雑さを把握する上で直面する課題を掘り下げ、研究室における日本語能力、専門知識、効果的コミュニケーションの重要性を強調した。

近藤・西坂（2021）は、留学生を経験した理系研究者のライフストーリーを描き、「研究は英語で」という言説が機能しない共同体の構造の問題を論じ、共同体の変容の模索が必要であると主張した。

さらに、山路ら（2020）は、英語での研究活動を前提とした留学生・研究員を対象として、研究室等の周辺環境を学習リソース化するコンセプトにより、

入門期の日本語教材と実践方法を提案している。

このように、理工系大学院の研究室に所属する留学生の増加は、研究室内外の言語コミュニケーションへの種々の変化を生んでいると推測される。この変化は、留学生が各々コミュニティで経験する言語の選択と運用に加え、修了後のキャリアパスに対しても、新たな課題を突き付けていると考えられる。

本研究は、英語プログラムに在籍する理工系大学院留学生（以下、留学生）を対象に、学習・研究活動上の日本語の使用状況、修了後の希望する進路等を調査し、かつ関連の意識調査を行う。それらの結果を基に、英語プログラムにおける日本語学習の位置づけと意義を明らかにすることと目的とする。

2. 調査概要

2022年10月下旬から11月下旬にかけて、某国立大学の理工系分野における英語プログラムに在籍する留学生を対象に、ウェブベースのアンケートとインタビュー調査を実施した。

アンケートでは、学生の日本滞在期間、日本語学習歴、在学中の日本語使用頻度、および卒業後の進路に関する資料を収集し、インタビューへの参加意向も確認した。質問紙は日本語と英語の二言語で提供され、70名の留学生（漢字圏30名、非漢字圏40名）から回答を得た。

さらに、協力が得られた24名の参加者に対し、アンケートの回答に基づき、日本語学習への認識と、

^{*1} 大阪大学スチューデント・ライフサイクルサポートセンター教授

^{*2} 大阪大学国際教育交流センター教授

^{*3} 大阪大学国際教育交流センター講師

^{*4} 名古屋大学高等教育研究センター特任准教授

それが将来のキャリア形成に与える影響について詳細なデータを収集するための半構造化インタビュー（1時間程度）を行った。

3. 結果および考察

回答者の日本滞在期間は、1年未満が39名（55.7%）、1～2年未満が14名（20.0%）、2～5年未満が15名（21.4%）、5年以上が2名（2.9%）である。日本語学習歴に関しては、日本語能力試験の受験経験者が31名（44.3%）、受験予定者が15名（34.3%）、受験していない者が24名（21.4%）であった。また、回答者の半数は大学が提供する日本語授業を受講した経験があると回答した一方で、専門分野の学習や研究室での活動との時間的な競合、またはGPAに与える影響への懸念を理由に、体系的な日本語学習の機会を逸しているとの回答も見られた。将来の進路については、アンケート調査では、日本国内での就職を希望する者が全体の約26名（37.1%）、日本での進学を考えている者が8名（11.4%）であり、大学院修了後のキャリアプランにおいて、日本での活動や就職を志向する傾向が示唆された。研究活動に日本語が必須ではないものの、高い日本語学習意欲が観察されたが、自身の日本語能力に対する自己評価は必ずしも高くなかった。

インタビュー調査により、英語プログラムに在籍する留学生の具体的な日本語使用状況が把握できた。調査結果から、留学生は英語による授業内容に対しては概ね満足しているが、日常生活におけるコミュニケーションや研究室内でのディスカッションに関しては、学生の日本語能力によっては日本語が使用される傾向にあることが明らかになった。例えば、日常生活において日本語が堪能な学生は、日本人の友人との会話には日本語を、留学生同士では英語を用いることが多い。また、研究活動に母語が使用される場合もある。専門的な話題では、使用言語が選択的に使い分けられる傾向が見られた。

また、専門用語の理解や学術的なプレゼンテーションの場面では、英語の使用が好まれていた。学会では、口頭発表は主に英語で行われるものの、ポスター発表では日本語が使用されるなど、学術的な言

語活動にも、言語の選択に柔軟性が見られた。

日本での就職を視野に入れている留学生は、留学前に母国で日本語を学び、留学後は自主学習や日本語能力試験の準備に取り組んでいた。母国での就職を望む学生や進路が未定の学生は、英語プログラムの修了後に直面する言語の壁や文化的適応の課題に対して不安を抱えていることも明らかとなった。

以上、英語プログラムの留学生には、少なからぬ日本語学習ニーズがあり、明確なキャリアの目標が学習意識の向上に寄与する意義が認められる。

4. 結論と今後の課題

留学生は教育課程の中で日本語能力に関する問題に直面し、これが現在の留学生の将来のキャリア選択に響く及ぼす可能性があることが示された。日本語教育は、在籍期間中に限定された学術活動を支援する一手段から、中長期的な日本滞在期間におけるキャリア形成に有利に働く条件整備要因へと、その意義が変化している。日本語学習への意欲の保持および実際の学習の継続が、日本での長期的なキャリア形成という志向との密接な関係性を有することが示唆される。変容するニーズも捉えつつ、より実践的な教育・支援プログラムの開発が求められる。

(yonstak.slics@osaka-u.ac.jp)

付記

本研究はJSPS基盤研究(C)22K00637の助成を受けた。

参考文献

- 1) 深川美帆・高島智美：理工系大学院留学生を対象とした日本語教育のニーズとコースデザイン，金沢大学留学生センター紀要，Vol.21，pp.15-27（2017）
- 2) 重田美咲：工学系研究室における博士課程留学生の生活調査，専門日本語教育研究，Vol.10，pp.35-40（2008）
- 3) 近藤行人・西坂祥平：理系の外国人研究者が向き合う日本語に関する経験-日本でアカデミックキャリアを積む研究者のストーリー-，日本語教育，Vol.179，pp.31-49（2021）
- 4) 山路奈保子・因京子・アブドゥハン恭子：研究コミュニティを活用した主体的学習支援のための入門期日本語教育，日本語教育，Vol.175，pp.115-129（2020）

大学院オンライン・ゼミナールにおける 留学生の質疑者としての参与と適応

Participation and Adaptation of International Students as Questioners in Graduate Online Seminars

烏日哲^{※1}
WuRija

キーワード：アカデミック日本語、教室談話、日本語学習者、質疑応答、コメント
Keywords: Academic Japanese, Classroom Discourse, Japanese Language Learners,
Question and answer session, Comments

1. はじめに（背景および目的）

ゼミナール（以下ゼミ）は大学院生にとって重要な研究の場であるが、教師によって一方的に行われる講義とは異なり、教師と学習者が参加者として対等な立場で双方向的に交流できる学習形態をとるため、高度な日本語力が要求される。ゼミで専門性の高い学術的な日本語をその場で理解し、さらに外国語である日本語を用いてその場で発話を組み立て、自分の意見を相手に伝えるということは、留学生にとって至難な業ともいえる。

国内外の大学生や大学院生を対象にしたアカデミック・ジャパニーズに関する近年の研究には、留学生の学術コミュニティへの参加を記録したケース・スタディー研究（郭2016）、ゼミ談話における「ブレイクダウン」がどのように起こりどのように修復されるかに注目した談話分析研究（嶺川2000）、発話機能の観点から質疑応答の発話の特徴を分析した徐（2021）、オンライン・ゼミナールにおける参加者間の社交について扱った石黒（2022）などがあるが、実際、留学生がゼミに参加する過程でどのようなプロセスを経てゼミ活動に適応していくのかについては、十分に研究がなされていない。また、オンラインでのゼミ活動が急速に広まった現状において、オンラインゼミでの談話がどのようになされ、それが留学生の適応プロセスにどのように影響しているかについても研究の余地がある。

本発表の目的は、ゼミ談話の複雑なやりとりの中で、留学生の質疑の際の談話が、ゼミ回数が重なる

につれ、どのように変容していったかについて、2020年4月～2022年3月まで行われた縦断ゼミ談話データを用いて考察し、留学生のゼミへの適応過程を明らかにすることである。

2. 方法

本発表の分析対象である大学院ゼミには、日本語学や日本語教育学を専攻する大学院正規生、大学院修了生と大学院研究生など合わせて常時26名前後の受講生がおり、中国語母語話者・ベトナム語母語話者・日本語母語話者で構成される。留学生は日本語学習歴などの面で多様な背景を持っているが、日本語レベルは全員N1以上である。

データの収集方法は、週に1度オンライン上で行われるゼミの様子を、Web会議システムの録画機能を用いて録画した。

本発表では、留学生のゼミ参加初期と半年後、1年後の3段階の各3回分、計9回のゼミ発表における質疑応答やコメントの文字化データを用いて留学生の発話の変化を考察した。

3. 結果および考察

考察観点①「ゼミでどのように話すか」：

留学生がコメントをするさいに、率直に意見を述べるか、前置き表現を用いて婉曲的に表現するかなど、ポライトネスに関わる行為的側面において話し方の変化が見られた。ゼミの初期段階（例1）では、単刀直入に質問を投げる発話からゼミの回数が重なるにつれ、前置き表現を駆使することで自己の専門

※1 国立国語研究所 研究系プロジェクト非常勤研究員

知識の欠如をフォローしながら質問をする発話が考察された。例2はS1が発表者に質問をするさいの発話である。まず、「発表者への感謝を表す」発話から、「発表に対する感想を述べる」発言をし、最後に「これからする質問についてフォローする」発話という3つのステップを踏んでから質問内容に入っている。こうした「礼儀的な発話」(徐, 2021)の重ね使いはゼミ初期に見られなかった話し方である。

例1：(ゼミ初期のS1のコメント)「えーと、まず、ちょっとわからないけど、ここでいう「学習者」とは中国人母語話者のことでしょうか」

例2：(一年後のS1のコメント)「ご発表ありがとうございます。興味深く聞かせていただきました。初歩的な質問で申し訳ありませんが、……」

考察観点②「留学生はどのような関係性の中で話すか」:

大学院ゼミには、研究生から修士・博士課程の学生、修了生、そして教員まで様々な立場の参加者がおり、周囲との上下関係や親疎関係によって役割や行動が異なってくる。本発表では、留学生がコメントをするさいにゼミ初期のころ、発表者との関係性のみを中心に発話を組み立てていたが、質問被りの場合に前置き表現を使うなど、質問者同士の関係性にも気を配れるようになっていることが分かった。

例3：(ゼミ初期のS2のコメント)「あの一、すみません、研究目的のところですが、……」

例4：(一年後のS2のコメント)「あの一、ちょっといいですか、さっきの〇〇さんがおっしゃったことともちょっと被るかもしれませんが、……」

例3と例4はいずれも発表者に向けた質問の発話であるが、例4のS2のコメントでは、前発言者への配慮と質問内容が前件と内容的につながりがあることを予告している。このような発話が話者交替による聞き手の負担を減らすうえで効果的であり、前発言者との発話内容的な重なりを自覚した上での発言

であるという意思表示で、トラブル回避にもつながると思われる。

4. おわりに

鳥(2020)では、ピアレスポンスの協同学習において、作文修正のきっかけの一つとして「他者に行ったコメント」が挙げられている。今後の研究では、留学生の質疑応答やコメントの表現のバリエーションの広がりや変容は、具体的になにをきっかけに、どのようなルートをたどったのかについて詳細に分析していく必要がある。また、ゼミでのコメントは、誤字脱字など表記に関わるものから、データ解釈など内容に関わるもの、研究全体の枠組みに関わるものまで様々である。ゼミでの立場や専門知識の有無によってコメントの内容がどのように変容していくのか、内容的な側面に着目していく。

(wuriija@ninjal.ac.jp)

付記 本発表は、JSPS 科研費 22K00655 (研究代表者: 鳥日哲) の助成を受けたものである。

参考文献

- 1) 石黒圭: コロナ禍におけるオンライン・ゼミナールの可能性—オンラインのゼミ談話に見るコミュニケーション活動の豊かさ—, 社会言語科学, Vol.25, No.1, pp.39-54 (2022)
- 2) 鳥日哲: 論文作成における表現修正のリソース—学習者は何をきっかけに論文を修正するのか—, どうすれば論文・レポートが書けるようになるのか, pp.27-47 (2020)
- 3) 郭菲: 中国人留学生の日本の大学院の学術的コミュニティへの参加—文系大学院生のケース・スタディー—, 阪大日本語研究, Vol.28, pp.109-141 (2016)
- 4) 徐煉: 大学院のゼミ談話における質疑応答の特徴の分析—発話カテゴリと発話機能の設定に向けて—, 一橋日本語教育研究, Vol.9, pp.61-76 (2021)
- 5) 嶺川由季: 大学院のゼミの談話におけるコミュニケーション・ブレイクダウンの修復について—『対話』と『共話』の視点から, 国際協力研究誌, Vol.6, No.1, p.105-117 (2000)

日本の大学における短期留学生のための会話教材（中級前半）の開発に向けて

—既存の会話教材の分析に基づく提案—

Developing of Conversation Teaching Materials for Short-term Exchange Students at Japanese Universities
(Early Intermediate Japanese):

Proposal based on an analysis of existing conversation materials

○今田 恵美^{※1} 大久保 加奈子^{※2} 川瀬 愛^{※3} 林 和子^{※4}

IMADA, Emi OHKUBO, Kanako KAWASE, Ai HAYASHI, Kazuko

キーワード：中級前半日本語、会話教材開発、教材分析、短期留学生、異文化間コミュニケーション
Keywords: Early intermediate Japanese, Development of conversation materials, Analysis of teaching materials, Short-term exchange students, Cross-cultural communication

1. はじめに（背景および目的）

筆者らが担当する大学の短期留学プログラムでは、中級前半の会話教材を探すのが難しいという声を担当者間で聞く。中級前半というレベルの持つ特徴と、短期留学生独自の特徴とニーズがあるためである。

中級前半の会話クラスは、初級文型や語彙を応用するタイプの会話練習からは離れるため、決まった教材がない。それに加え、中級後半以降ほど言語知識、およびそれらの運用能力に長けてはいないことからディスカッションなどの教材や、生教材の使用も難しい。

短期留学生の特徴として、学習時間が限られているということが挙げられ、効率よく学べる教材が必要である。また、過去のアンケート調査(内藤他 2012, 平井他 2017, 筆者らの調査 2023) から、彼らには言語知識の習得だけでなく運用力を短期間で強化したいというニーズや、日常会話(雑談)を日本人としたいという期待があることがわかっている。さらに、彼らが留学生生活を、異なる文化・価値観への理解と受容的な態度を獲得し、自己成長を遂げる機会と捉えていることが明らかとなっており、異文化間コミュニケーション能力の育成も望まれる。

以上のことから、筆者らは、以下3点の特徴を備えた短期留学生のための中級前半会話教材の作成に

取り組むことにした。

①限られた学習期間の中で、既習の言語知識や留学生の知識・経験を駆使できる内容(運用力の強化)

②日常会話や雑談を日本人としたいという留学生の期待に応えられるもの

③異文化間コミュニケーション能力が身につくもの
本調査では、既存の中級前半レベルの会話教材が上記の特徴をどの程度備えているか分析し、強化すべき点を明らかにし、教材作成の一助としたい。

2. 方法

既存の中級前半レベルの会話教材として、次の5冊の教材を取り上げ、それぞれのシラバスと上記3点の特徴を備えているかを分析した。『日本語でインターアクション』(以下『インター』)『聞いて覚える話し方日本語生中継初中級編1』(以下『生中継』)『日本語おしゃべりのたね』(以下『おしゃべり』)『会話に挑戦!中級前期からの日本語ロールプレイ』(以下『ロール』)『日本語集中トレーニング』(以下『トレーニング』)。『生中継』は聴解教材、『トレーニング』は総合教材であるが、スピーキングに重点を置いた指導が可能であることから、分析対象に含めた。①については、教材の課数と想定されている授業時間、既習の言語知識や習者自身の知識・経験を活用できる構造となっているかを分析した。②については交流会話・雑談を扱

※1 立命館大学政策科学部授業担当講師

※2 立命館大学日本語教育センター非常勤講師

※3 立命館大学日本語教育センター授業担当講師

※4 立命館大学経営学部授業担当講師

う箇所があるか、③については、異文化間コミュニケーションの話題の有無、その取り上げ方について調べた。

3. 結果および考察

①教材のシラバス・課数・一課あたりの所要時間を表1に示した。取り上げた5冊の課数は10課～22課、所要時間は1課あたり90分～720分であった。週1回90分の会話クラスを15週間とした場合、短期留学生在が使用するには『生中継』を除き、内容が多すぎると言える。教材に、既習の言語知識や、学習者自身の知識・経験を活用できる箇所があるかについては、『ロール』を除く4冊の教材の各課の冒頭に、学習者に自身の経験や意見を問いかけ、社会言語・文化的経験を呼び起こす箇所があった。『生中継』には既存の言語知識（初級後半程度）の復習をする箇所、『おしゃべり』には、教材の後ろに各課で使用できる初級後半レベルの文型のまとめがあった。しかし、総じて新出語彙や表現、会話の流れ等の学習項目が多く、運用練習時間の確保が難しい印象である。

②交流会話や雑談を扱う箇所があるかについては、『生中継』『ロール』『インター』『トレーニング』は場面シラバスと機能シラバスの複合シラバスとなっており、交渉会話等の定型会話が主で、交流会話の扱いは1課～数課程度と少なかった。いっぽう、『おしゃべり』は話題シラバスで、各課のテーマについて学習者の意見や経験を語る練習をするようになっており、交流会話が主と言える。ただ、交流会話を進めるための会話の流れについて学習する箇所はない。

③異文化間コミュニケーションの話題については、『インター』はある場面でどう振舞うかを考えさせ、日本と他文化との比較ができるようになっている。

『ロール』『トレーニング』では日本の生活習慣等を紹介するコラムがあるが、他の文化との比較をする箇所はない。『おしゃべり』は、全課を通して日本の文化習慣と学習者の文化習慣を比較する会話練習ができるようになっている。ただ、日本や他の文化と学習者の文化とを比較する箇所があっても、さらにそれを深める会話や、それについてどう考え、整理し、自身の成長に結びつけるかなどの振り返りをする内容はない。

今回の教材分析の結果を踏まえ、今後の教材作成には以下の点に留意したい。①課数・学習項目を短期留学生在に適切な数に絞ること、学習者の既存の知識や経験を生かす工夫を施すこと、運用練習の時間を確保できるようなデザインにすること。②交流会話（雑談）の話題を増やし、会話の展開の技術まで学習項目として提示すること、③異文化間コミュニケーションの話題を扱うだけでなく、その話題の深め方の学習、振り返りの箇所を設け、学習者の異文化理解能力の育成に寄与することである。

4. おわりに

今回は、中級前半レベルの短期留学生向け日本語会話教材作成の予備調査として日本語会話教材の分析を行った。本調査で明らかになった既存の教材の長所を生かしつつ、中級前半レベルであっても、異文化理解につながる自由な意見交換ができる教材の開発を目指したい。

(メールアドレス e-imada@fc.ritsumei.ac.jp)

参考文献

- 1) ガニエ, R. M.・ウェイジャー, W. W.・ゴラス, K. C.・ケラー, J. M. 著、鈴木克明・岩崎信監訳：インストラクショナルデザインの原理, 北大路書房 (2007)
- 2) 内藤真理子・小森万里・高橋旬子・辻恵子：日本語中上級総合教材開発と改訂―短期留学生特有の課題達成に向けて―, 立命館高等教育研究, 第12号, pp.177-196 (2012)
- 3) 平井一樹・今田恵美・上田俊介：立命館大学SKP修了生の留学生生活および日本語学習の振り返りと修了後の状況―追跡調査の記述分析より―, 立命館高等教育研究, 第16号, pp. 83-100 (2017)

表1：シラバス、課数・所要時間（分）／課

『インター』	場面・機能	10課・400or720
『生中継』	場面・機能	10課・120
『おしゃべり』	話題	20課・90～120
『ロール』	場面・機能	22課・90～100
『トレーニング』	場面・機能	15課・220

縦断学習者コーパスからみた 日本語学習者のフィラーの使用傾向

— ストーリーテリングを中心に —

A Longitudinal Corpus-based Analysis of Filler Usage by Japanese Learners
Focusing on Storytelling Data

呉 楚琦^{※1}
WU, Chuqi

キーワード：フィラー、学習者コーパス、B-JAS、日本語学習者、ストーリーテリング
Keywords: Filler, Learners' corpus, B-JAS, JSL Learner, Storytelling

1. はじめに（背景および目的）

日本語のフィラーには、沈黙を回避しコミュニケーションの途絶を防ぐ、発話権を維持する（山根 2002）、心内における情報処理作業を支援する（定延・田窪 1995）などの働きがあり、音声コミュニケーションに欠かせない要素である。日本語母語話者は、対話タスクと独話タスクでフィラーを使い分けられているが、日本語学習者の場合、タスクごとにフィラーを正確に使い分けことが困難である（小西 2018）。日本語学習者のフィラーの使用実態を分析した先行研究の多くは、インタビューなどの対話データに焦点を当てており、日本語学習者の独話におけるフィラーの使用傾向がまだ十分に明らかにされていない。また、学習者の習得過程を知る上で重要な、縦断的变化を扱ったものも管見の限りない。

そこで、本研究では、日本語学習者のストーリーテリングにおけるフィラーの使用傾向を(1)頻度、(2)形式、(3)位置という3つの観点から分析し、日本語母語話者と比較する。それにより、日本語学習者のフィラー習得研究および指導への貢献を目指す。

2. 方法

分析対象者は、『北京日本語学習者縦断コーパス (Beijing Corpus of Japanese as a Second Language)』(以下、B-JAS)における中国語を母語とする日本語学習者 16 名（初回放棄の 1 名を除く）である。また、日本語学習者と比較するために、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (International

Corpus of Japanese as a Second Language)』(以下、I-JAS)から日本語母語話者 16 名を無作為に抽出し、分析の対象とした。

B-JAS は、2015 年 9 月に入学した中国・北京の大学生（日本語学科）17 人を対象に、4 年間わたって発話データと作文データを合計 8 回収集した縦断コーパスであり、日本語をゼロから学ぶ学習者が入学から卒業までにたどる習得の過程を見ることが出来る。B-JAS・I-JAS のどちらも、ストーリーテリング（以下、ST）タスクが、提示された 4 コマ（あるいは 5 コマ）漫画を用いて行った。調査手順として、まず調査協力者に 1 分程度漫画を見せ、その後、指定された言い出し文に続けて、ストーリーを話してもらった。また、B-JAS における ST タスクは、奇数調査回/偶数調査回でそれぞれ 2 種類が実施されている。そのうち、奇数回に行われた「ピクニック (picnic)」と「鍵 (key)」が I-JAS と同じものである。そのため、B-JAS の分析にあたって、奇数回の発話データのみを分析対象とした。

3. 結果および考察

(1) 日本語学習者のフィラーの使用頻度については、1 万語あたりの調整頻度からみて、学年が上がるにつれて使用頻度が徐々に減少していることがわかった（図 1）。これに対して、対応ありの一元配置分散分析を行った結果、 $F(1.66, 24.92)=21.21$, $p<.001$, $\eta^2=0.40$ で有意であり、 η^2 効果量も大きいことが分かった。つまり、学年の上昇に伴い、日本

※1 国立国語研究所技術補佐員・一橋大学大学院生

語学習者のフィラーの使用頻度に変化が起こるとい
うことである。そこでShaffer法を用いて多重比較
を行ったところ、1年次より2年次、2年次より3
年次、3年次より4年次というように学年が上がる
ごとにフィラーの使用頻度が低下している ($p < .05$)
ことが確認できた。

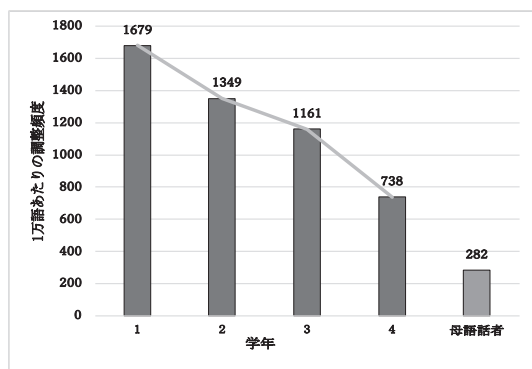


図1 各学年の日本語学習者および日本語母語話者のフィラーの使用頻度

また、語数あたりの使用頻度でみると、日本語学習者は1年次において、ほぼ6.0語に1回の割合でフィラーを使用している。2年次になると約7.4語に1回、3年次では8.6語に1回、4年次に上がるとほぼ13.5語に1回フィラーを使用していることが分かった。一方、日本語母語話者の場合は、語数あたりの頻度で見ると、ほぼ35.5語に1回フィラーを使用しており、日本語学習者と比べてはるかに使用率が低いことが分かった。この結果から、日本語学習者はいずれの学年でも日本語母語話者に比べてはるかにフィラーを多く使用していることが分かった。野田(2015)は、日本語学習者の感動詞の不自然な運用の一つとして、「感動詞の過剰使用」を挙げており、こうした過剰使用のフィラーが、無意識な使用として日本語学習者の口癖となり、不自然になることがあると指摘している。以上から、教育現場において、日本語学習者にフィラーの過剰使用を意識させて指導することの必要性が示唆される。

(2) 日本語学習者のフィラーの使用形式については、どの学年においても「あ」を初頭音に持つフィラーが最も多く使用されている。また、1年次では「ん」「う」から始まるフィラーが多く使われている。2年次になると、「あの」の使用が目立つ。これに対し、3年次と4年次におけるフィラーの使用

傾向は類似しており、1・2年次に比べて、「え」から始まるフィラーの割合が増加していることが観察された。一方、日本語母語話者のフィラーの分布は、「え」から始まるフィラーによってほぼ占められている(86%)。この結果から、いずれの学年においても、日本語学習者のフィラーの使用形式の傾向は日本語母語話者と大きく異なっているが、4年次に上がるにつれて、日本語母語話者の使用傾向に近づく傾向が窺えた。

(3) 日本語学習者が使用するフィラーの位置について、どの学年においても、発話の冒頭で使われるフィラーの割合は約20%から25%に収まっている。そのうち最も割合が高かったのは1年次(24%)で、最も低かったのは4年次(19%)である。冒頭に使われるフィラーの割合は全体的に、学年が上がるにつれ減少する傾向が見られた。一方、日本語母語話者の場合は、発話の冒頭でフィラーが使われる割合が29%となっており、学習者より高いことがわかった。また、各位置におけるフィラーの使用形式について、日本語学習者は発話冒頭・発話中のいずれでも「あ」から始まるフィラーが過半数を占めている。また、「う」や「ん」などのような中国語の発音に類似しているものも観察された。それに対し、日本語母語話者は発話冒頭・発話中のいずれにおいても「え」から始まるフィラーが全体の8割以上を占めている。そして、発話の冒頭に使われるフィラーのほとんどが、漫画の一つのコマから次のコマへと話が進む際に使われていることが分かった。

(wuchuqi@ninjal.ac.jp)

参考文献

- 1) 小西円：日本語学習者の習熟度別に見たフィラーの分析, 国立国語研究所論集, No.15, pp.91-105 (2018)
- 2) 定延利之・田窪行則：談話における心的操作モニター機構—心的操作標識「ええと」と「あの(-)」—, 言語研究, No.108, pp.74-93 (1995)
- 3) 野田尚史：日本語非母語話者の感動詞の不自然な運用, 感動詞の言語学, pp.149-165 (2015)
- 4) 山根智恵：日本語の談話におけるフィラー, くろしお出版, (2002)

日本語学習者の論理的な思考をいかに促進させるか

— 成果発表のポスターに見る学術日本語授業の問題点と改善策 —

How to Enhance the Logical Thinking Skills of Japanese Language Learners:

Problems and Solutions in Academic Japanese Instruction Through Poster Presentation

○李 羽喆^{※1} ○石黒 圭^{※2}
Yuzhe, LI Kei, ISHIGURO

キーワード：論理的思考、ポスター発表、学術日本語

Keywords : Logical Thinking, Poster Presentation, Japanese for Academic Purposes (JAP)

1. はじめに

学術的な研究発表は、専門日本語の運用を促進すると同時に、学習者の論理的思考力を伸ばす有力な手段として認識されている。特に、ポスター発表は、一枚のポスターを通じて、学習者が研究プロセスをどこまで深く理解し、成果を論理的に産出できているかが可視化される。本研究は、日本語学習者が作成した成果発表のポスターに着目し、そこから見える論理的思考力の育成に焦点を当てるものである。

本研究における「論理的思考」の育成は、数学教育で扱われる「形式論理」（太田・菊池 2019）ではなく、日本語学習者が書く際と話す際に、頭の中で構築された「論理的な枠組み」にかんする教育をさす。渡邊 (2011) によれば、人を説得する技術には、述べるべき内容の選択や順序によって構成される「論理的な筋道」が不可欠であり、何が必要な情報になり、何が不要になるのか、何が話のポイントになるのかを意識する必要があるという。

そこで、本研究は、JFL 環境で学ぶ日本語学習者が、学術日本語の授業で成果発表のために作成したポスターを分析し、論理的思考力の育成を目指す授業設計の問題点を明らかにし、改善策を探求することを目的としている。研究課題は次の通りである。

RQ1: 研究発表のために作成されたポスターに見られる問題点は何か。

RQ2: ポスターの問題点から導き出される学術日本語の授業内容の改善策は何か。

2. 方法

本研究では、中国国内の大学 3 年生 (2023 年度 45 人) が「Japanese Research Methods」という学術日本語の授業で、3~5 人のグループに分かれて作成した 9 枚のポスターを中心に、教師の作成した授業設計と講義内容 (全 15 回)、学習者の記入した授業中のワークシート (6 回分) と振り返り (3 回分) の記録を分析データとして使用している。

本授業の学年前期の目標は、グループでの研究計画書の作成と予備調査、その成果のポスター発表であり、学年後期の目標は、個人で研究計画書の作成と調査、その成果の口頭発表である。本研究で扱うデータは学年前期のものである。また、本授業では「実践コラム」と「読解の講義」を組み合わせて進行している。「実践コラム」は、研究構成に沿ってテーマから議論し、成果発表までの作成プロセスを支援し、研究計画書作成のための文章表現と口頭表現を指導する。「読解の講義」は、「科学の問い」^{注1}という教科書を使用し、学術的なアクティビティに必要な語彙・文法知識と読解力の強化を図る。

分析の手続きとしては、①ポスターの特徴とそこに見られた問題点を類型化する、②講義内容とワークシートに遡ってその問題点の発生原因を検討する、③発生原因の解消につながるような授業設計の改善点を示すという 3 段階を踏むようにした。

3. 結果および考察

本研究は、JFL 環境における日本語学習者が成果発表のために作成したポスターを分析し、論理的思

※1 マカオ大学日本研究センター 講師

※2 国立国語研究所 教授

考力の育成に向けた授業の改善策を探求するものである。RQ1のポスターの問題点では、次の表に示す4タイプ、すなわち、①問いと答えが繋がらない「問答不整合型」、②データの提示が不十分な「提示データ不足型」、③先行研究への参照が不十分な「参考文献不足型」、④学術性は低いが見覚的インパクトがある「非学術的展示型」が確認された。●は当てはまる項目で、△はやや当てはまる項目である。

表 ポスターの問題点

番号	問答不整合型	提示データ不足型	参考文献不足型	非学術的展示型
1			●	
2	●	△	●	●
3			△	
4	●	●	●	
5	●	●	●	
6	●		●	△
7	●		●	
8	●	●		
9	●		●	

特に、①「問答不整合型」と③「参考文献不足型」の問題が顕著であった。学習者は、研究の問いを設定しながらも、その結果との呼応ができず、「論理的な枠組み」の構築途中で迷子になってしまったことがうかがえた。また、自分のテーマや観点を支える根拠の収集意識の欠如も散見された。こうした問題点は、学習者の授業内容の理解に消化不良の面が見られ、論理的思考の指導が十分に行き届いていないことを示唆している。

RQ2の授業の改善策として、上記の4つの問題点に対応するには、「問いと答えの呼応」を自ら点検できるワークシートの導入や、「論理的な枠組み」を常に意識できる学習支援が求められよう。また、ピア・リーディングによる文献講読を通じて、先行研究への理解を深め、批判的思考を促す授業設計も重要であろう(石黒・鳥2020)。さらに、②「提示データ不足型」と④「非学術的展示型」の問題に対処するためのデータ収集にかんする足場かけのワークシートの工夫、データの提示方法や視覚情報に

論理性を持たせる明確な構造と適切なマッピングを組み入れることも提案したい。

学習者の振り返りからは、「論理的な枠組み」の構築は、決して短期間でできることではないという意見があった。1学年にわたる授業において、グループ発表と個人発表^{注2}という形態の異なる2つの発表を組み合わせさせて体験させても、十分ではないと思われる。「論理的な枠組み」を理解させ、応用につなげるために、長期にわたり、理論と実践を繰り返す必要があるのではないかと考えられる。

4. おわりに

本研究では、日本語教育における論理的思考力の育成という目標の達成に向けて、ポスター発表という具体的な成果物を分析の出発点に、学術的日本語授業が直面する問題点を明らかにすることを試みた。今後は、提案した改善策の実践と、さらなる有効性の検証が求められる。また、学習者が「論理的な枠組み」を自ら構築する過程で求められる教育的支援のあり方についても今後の課題としたい。

(yuzheli@um.edu.mo)

注

注1 田中祐輔(2022)(編)川端祐一郎・牛窪隆太・陳秀茵・張玥・庵功雄・前田直子(著)『日本語で考えたい 科学の問い(上) [文化と社会篇]』凡人社

注2 個人研究にかんする分析は、次の発表に譲りたい。

参考文献

- 1) 石黒圭・鳥日哲編(2020)『どうすれば論文・レポートが書けるようになるか—学習者から学ぶピア・レスポンス授業の科学』ココ出版
- 2) 太田亨・菊池和徳.(2019)「論理的思考力養成を目指した日本語教育と数学教育の連携授業 日韓プログラム予備教育の事例から」専門日本語教育研究, 21, 45-52.
- 3) 渡邊雅子(2012)「ディセムタシオンとエッセイ: 論文構造と思考法の仏米比較」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学) 58(2), 1-13.

パラグラフ・ライティングについての学習課題分析

A Learning-Task Analysis of Paragraph Writing

永井 敦^{※1}
NAGAI, Atsushi

キーワード：パラグラフ・ライティング、学習課題分析、インストラクショナルデザイン

Keywords: Paragraph Writing, Learning Task Analysis, Instructional Design

1. はじめに（背景および目的）

パラグラフ・ライティングは、特に高等教育機関でアカデミック・ライティングを求められる全ての学生にとって習得が求められるスキルの一つである。

高等教育においてはレポートを始め、論理的な文章を書くことが頻繁に求められる。だが、現状では、多くの日本の大学生は文章を「組み立てる技術」、つまり、パラグラフを構成するスキルを欠いている¹⁾。パラグラフとは論理的な文章を構成する上での「最小構成単位」であり²⁾、パラグラフがうまく構成できなければ、その文章は結果として、論理性を欠いた、分かりにくいものになる。

パラグラフ・ライティングが、未だに十分に普及していない理由の一つは、その教育内容について、明確な分析がなされてこなかったことが考えられる。確かにパラグラフ・ライティングについての指南書や研究論文は多数出版されているが、著者によって扱い方が様々であり、その基本となるルールの集合についても必ずしも合意が得られていない。

この現状をふまえ、既存の文献の分析に基づいた、パラグラフ・ライティングの「基本ルール」（表 1）が提案されている³⁾。これによれば、ルールの 1 と 2 はパラグラフを構成する上での最重要ルールとされ、ルール 7 から 10 は補助的なものとされている。

このように、パラグラフ・ライティングの内容についてはある程度整理されたと言えるものの、これらをどのように系列化すべきかという問題が残る。したがって、本研究は、基本ルール群の構造を分析することで、どのような順番で教えるべきかという、教授上の具体的な問いに答えることを目指す。

表 1 パラグラフ・ライティングの基本ルール

ルール 1	1つのパラグラフは、1つのトピックについてのみ述べる。
ルール 2	パラグラフは、トピック・センテンスとサポーティング・センテンスで構成する。
ルール 3	トピック・センテンスは、パラグラフの先頭に置く。
ルール 4	トピック・センテンスは、コントロール・アイデアで方向付ける。
ルール 5	サポーティング・センテンスは、トピック・センテンスと関連させる。
ルール 6	サポーティング・センテンスは、具体的に述べる。
ルール 7	サポーティング・センテンスは、読み手の標準的な順序意識に沿う形で情報を配列する。
ルール 8	メタ言語は、くどくなりすぎない範囲で積極的に使用する。
ルール 9	パラグラフは、200～400字で、4つから8つの文を目安に構成する。
ルール 10	複数のパラグラフから成る文章は、パラグラフの内部構造と文章全体の構造の同型性を意識して構成する。

2. 方法

表 1 に示されているパラグラフ・ライティングの基本ルールを対象として、「学習課題分析」(learning-task analysis)⁴⁾を方法として用いた。学習課題分析は、インストラクショナルデザインで用いられる分析手法で、パラグラフ・ライティングのような知的技

※1 神戸大学グローバル教育センター特命講師

能の学習成果に関する下位技能間の構造を明確にする上で有効な手法である。ここで「知的技能」とは、ガニエによって提案された学習成果の五分類の一つで「事物の弁別、ルールや原理の適用、問題解決のように、シンボルを使いこなす能力」⁴⁾を意味する。

課題分析は、最終目標から逆向きにトップダウンで行われ、最終の目標がより単純な構成要素に連続的に分解されていくとき、その結果は「学習階層図」(learning hierarchy)と呼ばれる⁴⁾。学習階層図は教授者が授業を設計する際のガイドとなる。

3. 結果および考察

学習課題分析に基づいて、学習階層図を作成した(図1)。各記述においては、学習成果(特に知的技能)の種類を明確化のために「能力動詞」⁴⁾を使用し、下線を付した。点線で囲まれているものは「補助ルール」と呼ばれ、より効果的な文章作成につながるルールだが、使用は必須ではないことを示す³⁾。なお、TSはトピック・センテンスを、SSはサポーティング・センテンスを意味する。学習階層図作成の結果、主要な知的技能としてI~IVが同定された。想定される前提技能も挙げているが、学習者の準備状況に応じて指導

に組み込むこともあり得るだろう。

4. おわりに

本稿では、パラグラフ・ライティングの教育内容について、インストラクションデザインの分析手法である学習課題分析を実行することで、教授項目の系列の明示を試みた。今後の課題として、今回作成された学習階層図の妥当性の検証は無論のこと、パラグラフ・ライティングのどの要素技能に対してどの程度の時間を配分してインストラクションを行うかの検討、そのための具体的な教授・学習活動の設計、また、その教育効果についての検証が挙げられる。

(a.nagai.lg@gmail.com)

参考文献

- 1) 渡辺哲司・島田康行：ライティングの高大接続，ひつじ書房（2017）
- 2) 戸田山和久：最新版 論文の教室，NHK 出版（2022）
- 3) 永井敦：パラグラフ・ライティングの基本ルール：日本語パラグラフ・ライティング教育の体系化に向けて，神戸大学留学生教育研究，Vol.7, pp.1-20（2023）
- 4) R.ガニエ・W. ウェイジャー・K.ゴラス・J. ケラー：インストラクショナルデザインの原理，北大路書房（2007）

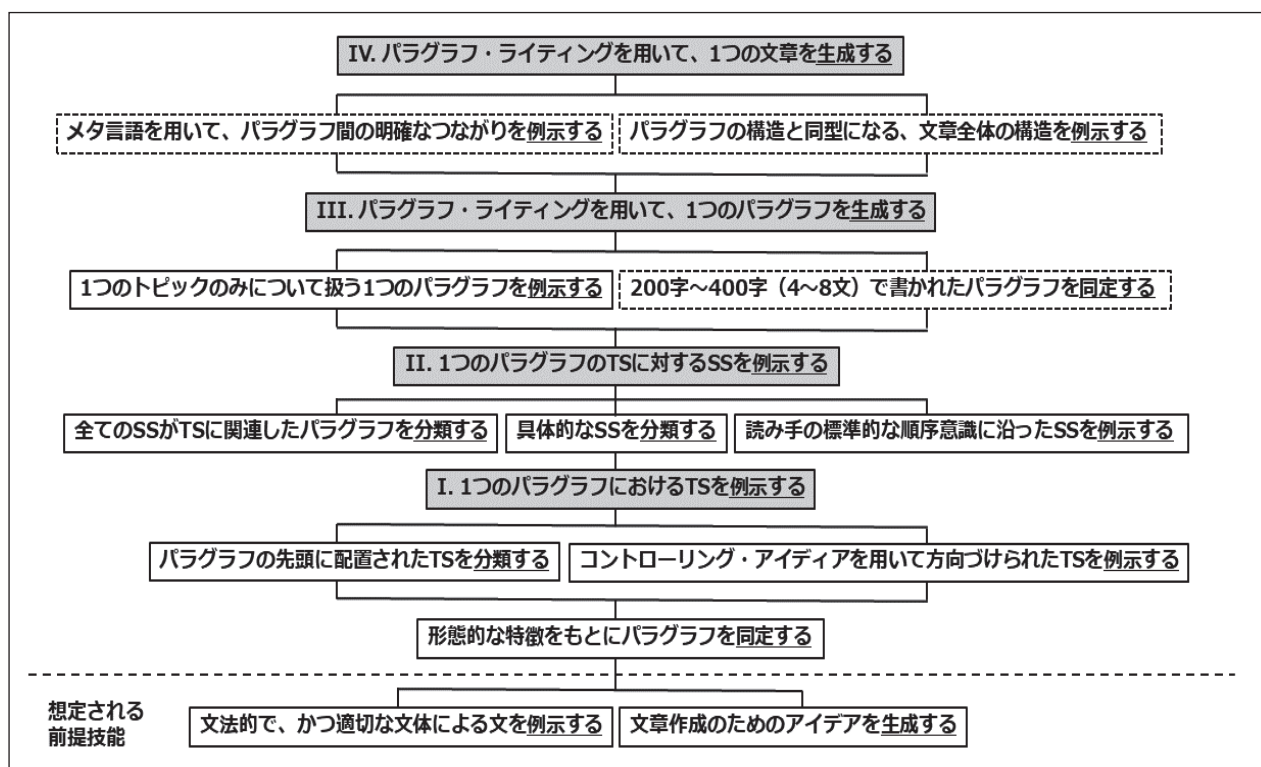


図1 パラグラフ・ライティングの学習階層図

医療専攻留学生の抱える学習上の困難点

—日本語教育実践及び留学生支援検討の基礎として—

The Learning Challenges Faced by International Medical Students:

As a Foundation for Japanese Language Education Practices and Support for International Students

山口 真葵^{※1}
YAMAGUCHI, Maki

キーワード：医療専攻留学生, 学習上の困難点, アクティブラーニング

Keywords: International Medical Students, The Learning Challenges, Active learning

1. 背景と目的

高等教育機関における外国人医療従事者の養成が増え、大学における医療専攻留学生の学習支援を目的とした研究が進められている。しかし、医療専攻留学生の学習支援の対象は「医療用語」が中心であり、これまでの研究では漢字や語彙などの分析が主軸であった(石鍋 2010 など)。日本語教育において充実した学習支援を行うためには、より包括的な視野で学習上の困難点を明らかにする必要があると考える。

2012 年以降、大学教育全体においてアクティブラーニングが推進されている。医療系学部では、もともと臨地実習や技術演習という学生参加型の教育形態があったが、アクティブラーニングが育成を目指す「認知的、倫理的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力」は医療従事者としてケアを行う上で、また患者理解を深める上でも必要な能力であるとされることから、近年は以前にもまして、講義や演習において積極的に取り組まれている(村上 2019 など)。その結果、「グループワークなどチームでの学修におけるコミュニケーション上の不安」「課題発表の際の日本の手順、マナーに対する不安」などアクティブラーニングに関するものであると考えられる困難点を留学生が抱えているという指摘が看護教育研究領域よりなされている(王・磯山 2019)。

本研究ではアクティブラーニングの推進という大学教育の質的変換を踏まえ、包括的に医療専攻留学生の抱える学習上の困難点を明らかにすることを目

的とし、より充実した学習支援を検討するための基礎とすることを旨とする。

2. 方法

2023 年 7 月 27 から 8 月 7 日までに大学で医療を専攻する 1、2 年生の留学生 4 名(いずれも中国人留学生)を対象に来日前から現在までの経験について一人あたり 1~2 時間程度の半構造化インタビューを行った。録音したデータを文字化した後、大学の学習上の困難点について語られている箇所を全て抽出し、SCAT(大谷 2019)を用いて分析を行った。調査協力者の情報は表 1 のとおりである。

3. 結果

分析の結果、大学における学習上の困難点として調査協力者 A からは 5 つ、B からは 4 つ、C からは 6 つ D からは 2 つの構成概念が抽出された。

中国での看護師経験がある A は「日本の大学と中国の看護専門学校の学習スタイルの違い」が一番の障害であったと捉えていた。詰め込み型で暗記重視の中国の学習スタイルを保持していたため、授業内容の整理や考察を常に求める思考力重視の日本型の看護教育に慣れず、自分の考えを書く課題の重要性を理解するのに時間がかかったという。また『自分の考えを書く』ための日本語力の不足にも困難を覚えていた。

調査協力者 B は、「講義内容の聞き取り」「実技実習の要点把握」「グループディスカッションにおける日本人学生の若者言葉や省略言葉の理解」といった

^{※1} 明海大学多言語コミュニケーションセンター講師

日本語の聞き取りに困難を覚えていた。また、調査協力者 C は「日本と中国の教育課程の違いによる基礎知識の不足」「カタカナ表記の専門用語の理解」「一人暮らしへの適応と勉強の両立」を困難点として挙げていた。調査協力者 D は、日本語への自信のなさや日中のディスカッションスタイルの違いから「グループディスカッションで意見をいうこと」に難しさを感じていた。また「病院実習（見学）時のカンファレンスにおける発表や受け答え」にも恐怖を感じ、日本人学生とのディスカッションやプレゼンテーションを行う機会の必要性を感じていた。

2人以上の協力者が困難点としてあげていたのは「1 講義内容の聞き取り」「2 授業の振り返りやレポート作成時の書く力の不足」「3 日本語コミュニケーション力を高めるのが困難な環境」「4 同じ境遇の仲間（同じ専攻で同じ留学生）の不在」であった。「2」は社会人経験者である A、B が挙げており、日本人学生との年齢差や、授業コマ数の多さから、友達ができにくい環境にあり、日本語会話力の向上の機会がないことを残念であると考えていた。「3」については、大学で医療を専攻する留学生は少数であるため留学生の抱える困難さや学科の勉強の大変さなどを共有できる人がいなかったこと、それによってストレスを抱えていたことが語られた。

4. 考察

調査から明らかになった各自の学習上の困難点を比較検討した結果、3つの特徴が浮かびあがってきた。一つ目はこれまでの研究でも指摘されていたが、「講義の聞き取り」「カタカナ表記の理解」の困難さの原因となる「専門用語の理解の難しさ」である。

二つ目は、「アクティブラーニングへの対応の困難さ」に起因するものである。「大量の感想文・レポート課題への対応」「授業内のグループディスカッションにおける理解と発言」「病院実習のカンファレンスにおける発表や受け答え」「（病院実習において）端的にわかりやすく伝える日本語能力」等、ディスカッションや課題への対応、病院実習における発表やコミュニケーションといった講義や実習における学生主体の能動的な学習において恐れや不安

を抱えている様子が窺えた。また、アクティブラーニングを積極的に取り入れた日本の大学教育の方針は、留学生の母国との「学習スタイルの違い」といった経験とそれに由来する意識面の問題を生み出し、それが学習上の障害となっている様子も見られた。

三つ目は授業コマ数の多さや、同じ専攻で同じ留学生という同じ境遇の仲間の不在による「友人との関係形成が困難な環境」という特徴である。これは日本人学生と話す機会の不足や、同じ境遇の仲間と悩みを共有し、ストレス解消を図るといった心理面の安定を図る機会の不足に繋がっていると考えられる。

以上から、医療専攻留学生の日本語教育を考える上で、ディスカッションやプレゼンテーション、振り返りシートの作成方法等アクティブラーニングへの対応を目指した実践の充実を図ることや、学科や学部を超えて留学生同士が交流できる場の提供、日本人学生との交流授業等を考慮に入れる必要があると考えられる。

表 1：調査協力者情報

協力者	専攻	学年	備考
A	看護	2	母国での看護師経験あり
B	理学療法	2	母国での社会人経験あり
C	医学検査	2	高校卒業後大学進学
D	看護	1	介護の学習経験あり

(makimakisaran0725@gmail.com)

参考文献

- 1) 石鍋浩：医療福祉領域日本語学習者のための選定学習漢字の評価—専門科目の授業場面における検討—, 茨城大学留学生センター紀要, 8 巻, pp.53-64, (2010)
- 2) 王麗華, 磯山優：日本の看護大学で学ぶ外国人留学生の授業から実習への学習段階の移行に関する研究, 大東文化大学紀要, 58 巻, pp.21-33,(2019)
- 3) 大谷尚：質的研究の考え方 研究方法論から SCAT による分析まで, 名古屋大学出版会, (2019)
- 4) 村上大介：看護学教育におけるアクティブラーニングの研究動向, 東北文化学園大学看護学科紀要, 8 巻, 1 号, pp.19-26,(2019)

介護用語学習支援のための 視聴覚素材ライブラリの開発

Development of Audiovisual Material Library to Support Learning of Technical Terms in the Nursing Care Field

○布尾 勝一郎^{※1} 角南 北斗^{※2} 奥村 匡子^{※3} 齊藤 真美^{※4} 中川 健司^{※5}
NUNOO, Katsuichiro SUNAMI, Hokuto OKUMURA, Kyoko SAITO, Mami
NAKAGAWA, Kenji

キーワード：介護用語、視聴覚素材、ウェブサイト

Keywords: technical terms in the nursing care field, audiovisual materials, website

1. はじめに（背景および目的）

外国人介護人材（以下、介護人材）の増加に伴い、彼らに対する学習支援も多様化している。技能実習生や特定技能のように介護福祉士国家試験（以下、国家試験）の受験が必須ではない介護人材についても、現場のニーズや本人のキャリア形成のため、将来的に国家試験を受験する者が一定数いる可能性が高い。

介護用語は、国家試験受験に向けた介護の専門内容理解の基礎をなすが、福祉や医学、生活文化等内容が多岐にわたり習得は容易ではない。その意味内容によりア) 訳語で理解できるもの、イ) 訳語だけでなく説明が必要なもの、ウ) ことばによる説明のみでは理解が難しく、視覚情報の助けが必要なものの3つに介護用語は大別され、ウ) は、主に①介護現場に関するもの（介護に伴う動作や体勢、福祉道具、利用者の食事等）と②利用者の自宅での日常生活に関わるもの（住居、家具、衣服、日常生活等での動作）の2種類がある。ア) イ) に関しては中川ほか（2017）や布尾ほか（2023）のようにそれに対応する教材が既に開発されており、ウ) ①についても、近年刊行された介護人材向けの教科書ではイラストや写真が掲載されているものが多く、一定程度カバーされていると考えられる。一方、ウ) ②を中心に扱った教材はまだないため、本

研究では、介護用語の理解を助ける視覚情報を掲載した視聴覚素材ライブラリ「見てわかる介護のことば」<[http:// mitewakaru-kaigo.com](http://mitewakaru-kaigo.com)>の開発を試みた。

2. 教材開発のプロセス

教材で扱う用語は、選定作業実施時に直近の3年間に実施された第33-35回国家試験の過去問題を対象に次の手順で選定した。国家試験を対象にしたのは、介護人材が国家試験に向けた学習を行う際に、過去問題を扱うことが多く、その中に出てくる介護用語を理解する必要性が高いからである。介護の日本語学習支援経験10年以上の日本語教師2名が、3回分の国家試験の過去問題をすべて通読したうえで、前述のウ) ②に分類される「ことばによる説明では理解が難しく、視覚情報の助けが必要」と考えられる用語を、介護人材が日常的に目にする機会が少ないもの、を中心に抽出した。この段階で112語が抽出されたが、2名が共通して選んだ語は8語であった。

次に、これらの語について前述の2名を含めた共同研究のメンバー5名により採用する用語を取捨選択した。その際に考慮したのは以下の点である。

- 介護人材が日常的に目にする機会が少ない事物
- インターネットで画像検索をしても、適当な画像が容易には見つからないもの

その結果、45語が選定された。45語には、日本以外では必ずしも一般的でない生活用品、システム（例：浴衣、お薬カレンダー、配食サービス）、動作（例：腕を組む、浅く座る、背筋を伸ばす）、介護用品・道具・施設にある用具（例：耳かけ型補聴器）、利用者

^{※1} 立命館アジア太平洋大学准教授

^{※2} フリーランス

^{※3} 神奈川大学特任助教

^{※4} 日越大学 JICA 長期専門家

^{※5} 横浜国立大学教授

の居室・住環境に関するもの（例：開き戸、引き戸、パネルヒーター）といった語が含まれる。対象となる用語の視覚情報（写真、動画）については、研究メンバーが撮影するなどして準備した。

3. ライブラリの機能

本教材は、「A. 用語の一覧ページ（図1）」と「B. 各用語の詳細ページ（図2）」からなる、ウェブサイトである。Aで用語を選択するとBに遷移し、当該用語の写真（動画）や、その用語が用いられた国家試験の問題、補足情報が閲覧できる。ここでいう補足情報とは、例えば「パネルヒーター」という語であれば、「室内をあたたくする器具。ストーブ等と比べて高齢者がやけどをしにくい。トイレや浴室等狭い場所にも設置可能。」という情報のことである。

収録対象となっている用語は分野を網羅するようなものではなく数に限られる。そこで本教材では、一般の用語データベースに見られるようなキーワード検索機能やカテゴリー分類よりも、シンプルにすべての用語をリストとして見せることを優先している。これは、サイトの訪問者が収録用語の全体像を早く把握



図1 A. 用語の一覧ページ



図2 B. 各用語の詳細ページ

できるようにすることを意識した設計である。

掲載している写真素材はすべてダウンロードして自由に加工して使えるようになっているが、素材のまま提示すれば済むような場合も多いと思われる。そこで、拡大表示機能とスライドショー機能を用意し、タブレットなどの端末での直接表示や、プロジェクターを使った投影でも使いやすくしている。

4. おわりに

外国人介護人材の多様化、及び従事する業務の多様化が進んでいる現在、本教材で提供される視覚情報は、介護用語を学習する上で大きな助けになると考えられる。また、今後、これまで発表者の研究グループで開発した他の介護専門用語の教材^注と組み合わせた、有効な学習支援の方法の開発を進めていきたい。

付記

本研究は、科研費研究課題「介護の日本語の理解のための視覚素材ライブラリの開発」（19H01268）の成果である。

注

発表者らはこれまで以下の介護用語の教材を開発してきた。

- ・漢字学習ウェブサイト「介護の漢字サポーター」
<<http://kaigo-kanji.com>>
- ・介護専門用語検索ウェブサイト「介護のことはサーチ」
<<http://kaigo-kotoba.com>>
- ・介護専門用語学習支援ウェブサイト「かいごのご！」
<<https://kaigonogo.com/>>
- ・「やさしい日本語でまなぶ介護の専門用語集」
<<https://yasanichi-kaigo.com/>>

参考文献

- 1) 中川健司・角南北斗・齊藤真美・布尾勝一郎・橋本洋輔・野村愛：介護福祉士候補者のための介護用語学習支援ウェブサイト『かいごのご！』, 2017年度日本語教育学会春季大予稿集, pp.362-366 (2017)
- 2) 布尾勝一郎・中川健司・角南北斗：「やさしい日本語でまなぶ介護専門用語集」の開発と拡充—介護福祉士国家試験を目指す外国人介護労働者を対象として—, 専門日本語教育研究, 25, pp.91-98 (2023)

スポーツ留学生と日本語

～学生の語りから見た日本語力獲得の過程とその検証～

International Student Athlete and Japanese Language ~The Process of Acquiring Japanese Ability
Observed through the Student's Narrative and its Assessment

○日野純子^{※1} 東会娟^{※2}

HINO, Junko DONG, Huijuan

キーワード：スポーツ留学生、M-GTA, CEFR

Keywords: international student athlete, M-GTA, CEFR

1. はじめに

文部科学省主導による大学運動部強化の動きや入試制度の多様化の影響もあり、私立大学では全体の42.2%がスポーツ推薦入試制度を実施している（旺文社調査報告 2019）。これに伴い、外国籍のスポーツ留学生（「スポーツ選手としての留学、または競技力向上や、そのための練習活動を行うことを主目的として、日本に滞在している外国籍留学生」（松元・高橋 2009）も増加し、その存在がメディア等を通じて注目され、各強化運動部での活躍が期待されている。競技活動中心の学生生活を行うスポーツ留学生に対しては、一般留学生とは異なる枠組みでの学修・キャリア支援を行う必要があるものの、その実情について報告や調査がほとんどない。日本語の習得のプロセス・日本語教育についての知見も限られている。渡辺（2022）はラグビー特有の語彙教育についての実践である。三代（2014）は、スポーツ留学生のライフストーリーの分析から、スポーツ留学生の学習言語能力に関する固定概念から離れ、セカンドキャリア構築に向けての「第三の他者」となる日本語教員の役割を問うている。スポーツ留学生は出身国、母語、競技のレベルや特性、指導者・チームメイトとの関係性、卒業後の予定等により、日本語に対する態度、およびその変容の過程に違いが出るのではないかと。本稿はトップレベルで活躍するラグビーの留学生が大学四年間でどのように日本語に向き合ったかについて分析した。

^{※1} 帝京大学教育学部教授

^{※2} 帝京大学日本語教育センター准教授

2. 方法

調査対象となった四年次のスポーツ留学生Aは英語圏出身でトップレベルの大学ラグビー部では、レギュラーメンバーである。日本語力ゼロであったAがどのように日本語と向き合い、日本語力を獲得し、卒業後のキャリアの中でどのように日本語使用を位置づけているのかについて、2023年11月中旬、約1時間の半構造化インタビューを行った。インタビューアーはAとは初対面の研究者1、Aの日本語教員であった研究者2の2名であった。研究目的、データの扱い、個人情報への配慮などを英語で説明し、調査参加の承諾を得たのち、英語または日本語で、来日前から現在に至るまでの時系列で語ってもらった。発話はAの許可を得て録音し、文字化した。

3. 結果および考察

3.1 カテゴリー化

発話データを修正グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて分析した結果、時系列で、三つのカテゴリーと合計13の概念が生成された。具体的にはカテゴリーI【不安・混乱・ストレス】（「日本語ゼロのストレス」「部活文化への戸惑い」「英語話者の先輩・通訳への依存」）の3概念、II【不安・混乱・ストレスの軽減】（「日本語クラスでの学習」「指導者からの精神的サポート」「友人とのやりとり」「キーワードのストラテジー」「先輩としての自信の芽生え」「日本語教員からのアドバイス」「メンターからのアドバイス」）の8概念、III【将来展望】（「日本語力の大切さの認識」「明確なキャリ

ア展望」の2概念)である。来日直後のAは、日本語がわからない不安や混乱、「そうじ」や「身だしなみ」を重んじる独特の部内文化への戸惑いをかかえ、英語話者の先輩や通訳に依存していた(カテゴリーI)。1,2年次に日本語クラス(週3回)でひらがな・カタカナ・基本文法を学びながら、キーワードを使っての理解や日本人学生との会話といった独自のストラテジーを用い、日本語を習得していく。その原動力となったのは、指導者による競技力向上のためには、日本語や部内文化の理解が必須であるという説得や「父親」のような精神的サポート、日本語教員のアドバイスによる特定の友人とのやりとり、また同様の経験をした英語話者メンターからの助言などがあった。その後、先輩になるとともに、日本語力、競技力や生活全般について「自信」をもっていく(カテゴリーII)。さらに英語話者が監督である実業団チームに内定している卒業後についても、競技者としての明確なキャリアとともに、引退、帰国後も日本語力を生かしたキャリアのビジョン形成ができた(カテゴリーIII)。Aの日本語獲得と変容の過程を図1で示す。

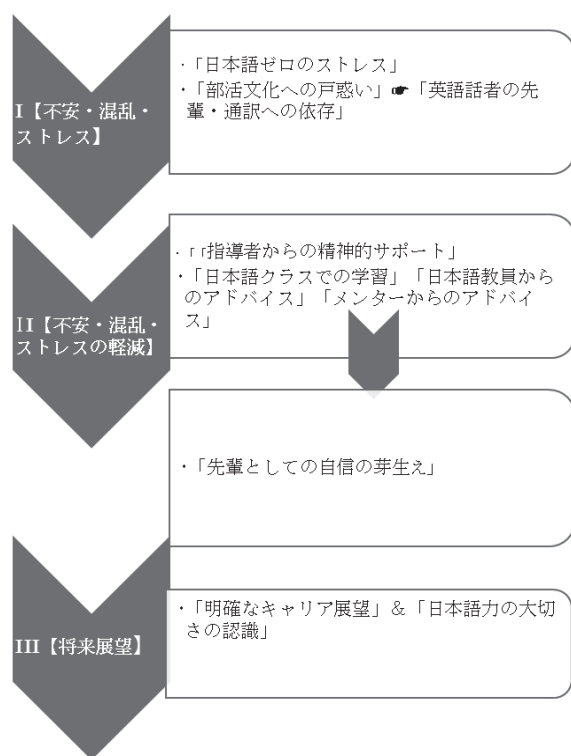


図1 日本語力獲得と変容の過程

3.2 日本語力の検証

Aは、上級生になり自信を持つようになったことや、授業での理解度が「0.5%」だったものが「40-50%」は時間かかるが理解できるようになった」と述べているが、客観的な評価により検証する必要がある。そこで、「身近な話題についての会話なら準備なしに参加できる」や「時には言いたいことが言えない場合もあるが、会話や議論を続けることができる」など、JFスタンダードのB1~B2レベルにあたる23の言語活動場面をピックアップし、5段階(1.できない、2.あまりできない、3.まあできる、4.できる、5.よくできる)の自己評価を実施したところ、項目により2~4点とばらつきが見られたものの、中央値の3点が最多であった。

4. おわりに

総じて、ゼロであったAの日本語力が、上記のレベルまで向上し、将来的にも日本語力を生かしていくビジョンを持ち得た過程には、日本語クラス、独自のストラテジーに加え、日本語力と競技力との密接な関係性を説き、精神的支えとなった指導者の存在が、複合的に影響していた。今後は、競技の種類やレベルが異なるスポーツ留学生との比較も行い、日本語支援の方向性を検討していきたい。

(tjhino0329@gmail.com)

(*2dong@main.teikyo-u.ac.jp)

参考文献

- 1) 旺文社調査報告(2019)
<https://www.obunsha.co.jp/news/detail/566>
- 2) 松元秀雄・2)高橋直人(2009)「外国人スポーツ留学の日本の大学への受け入れの現状と課題:ラグビー選手に着目して」『順天堂スポーツ健康科学研究』1(2), pp.214-224.
- 3) 三代純平(2014)「学習言語能力の「問題」は誰の問題か—スポーツ留学生Aのライフストーリーから—」『徳山大学総合研究所紀要』(36), pp.89-103.
- 4) 渡辺史央(2022)「外国人スポーツ留学生を対象とした日本語授業の一考察—専門語彙リスト作成とタスクを取り入れた実践」『高等教育フォーラム』vol.12, pp.13-2.

ピアノのレッスンにおける教授内容と言語表現

—音のメタファーに注目して—

Teaching Content and Linguistic Expression in a Piano Lesson:

Focus on the Metaphors of Sound

小笠 恵美子^{※1}

OGASA, Emiko

キーワード：文脈、音形の表現、奏法の表現、心情表現、説明の意図

Keywords: Context, Description of Sound Patterns, Description of Renditions, Explanation of Feelings, Purpose of Explanation

1. はじめに

音楽大学に進学する留学生が増加する中、実技のレッスン中のやりとりができないことが特に問題視されている。茶谷¹⁾はレッスンにおいて専門用語の理解が必要であるとされていることから、日本語の授業に音楽の解説書を読むことを取り入れた。音楽レッスンの相互行為については山本²⁾が動作を含めて詳細に記述して相互行為を分析している。

音楽と言語の関係性については、佐藤³⁾が、音楽家によるアマチュアオーケストラの指導のプロトコルデータを用いてレッスンの分析を行い、言語化による音楽への意識化の重要性を述べ、言語によるメタファー的表現について「単に言語表現を補完するものとしてだけで使っているのではない(中略)演奏行為とその内容を指示するための表現だ」(p.177)と述べている。

本研究は、音楽専攻の留学生の日本語支援のあり方を追究することを目的とする。ここでは、ピアノの個人レッスンにおいて、佐藤が重視したメタファー的表現(以下、メタファー)が具体的にどのように使用されているかを探ることとした。

2. 方法

本研究のデータは、公開レッスンを行った様子を収録した youtube 動画「仲道郁代・ベートーヴェン マスタークラス(前編)亀井聖矢『ワルトシュタイン』」⁴⁾から採取した。受講するピアニストが音楽大学の学生、指導するピアニストがその音楽大学

^{※1} 昭和音楽大学准教授

の教授であることから、一般の「学生」「指導者」関係のレッスンに近似していると考えられる。なお、本稿では、一般的な音楽教授場面で使用される「レッスン」「指導者」「生徒」という用語を使用する。

動画(約 15 分の演奏を含め 84 分)は、本研究の目的に照らして音声言語を中心にトランスクリプトを作成し、分析は、①教授内容ごとに発話を区切る②メタファーを取り上げる③メタファーを使用文脈で分類するという手順で行った。

3. 結果および考察

前節の手順を経て、音のリズム(表 1 下線部)や高低といった楽譜上の音形の表現(以下「音形の表現」)、演奏の方法の表現(以下「奏法の表現」)、曲や楽章など大きな単位で示される心情的表現(以下「心情表現」)、その他の 4 種に分類がなされた。各分類の例を表 2(下線部がメタファー)に示す。メタファーは音形の表現にも、奏法の表現にも同時に現れることがある。指導者が演奏、歌、身振りとともに一定の音形を説明した後すぐにその部分の奏法を、メタファーを伴って説明する様子が見られた(表 1 波線部)。また、心情表現は作曲家の状況の説明などを含む長い物語として表現されることがある(表 1 点線部)。このような心情表現を音楽で示すことの難しさからか、指導者は説明の意図を説明することがある。そこでは、心情表現が作曲家や音楽にとってどのように意味付けされるか、説明の際に使われたメタファーが曲のイメージとどう関連しているかが語られていた(表 2「その他」)。

日本語学習者はどのような語を検索しているのか

—語彙検索行動データの語種に着目して—

What Words Are Japanese Language Learners Searching For?:

Focusing on the word classification of the vocabulary search behavior Data

○佐野 彩子^{※1}
SANO, Ayako

○吉 甜^{※2}
JI, Tian

○石黒 圭^{※3}
ISHIGURO, Kei

キーワード：語彙検索行動、語種、母語、日本語レベル

Keywords: vocabulary search behavior, word classification, native language, Japanese proficiency level

1. はじめに

ICT 端末の急速な進化とともに、日本語学習者の多くが紙の辞書の代わりにスマートフォンや PC を用いて辞書アプリ、インターネット上の辞書リソースを利用している。しかし、学習者がどのような言葉をどのように調べているのか、その結果として本当に必要な情報にたどりつけているのか、といった検索行動は、日本語教師からは見えにくい。

日本語学習者の辞書使用にかんする研究では、鈴木ほか (2020) で学習者目線に立った辞書ツールの整備が不十分なことが指摘されている。学習者に作文 (鈴木・高野, 2015) や読解 (野田ほか, 2020) の課題を与える過程で行われた実験調査はあるが、学習者の自然な日常を観察した実態調査が不足しているという現状がある。

2. 研究方法

学習者の日常生活における辞書使用の実態を明らかにするため、辞書検索行動の調査を実施した。海外の 10 大学と日本国内の 1 大学で学ぶ日本語学習者 110 名に、日常生活での辞書使用について 1 週間 (連続する 7 日間) の記録を依頼した。調査期間は、2022 年 1 月～12 月である。

検索行動の記録について、検索する際にデバイスに内蔵されている画面収録機能を使用し、検索画面を録画してもらった (以下：録画データ)。また、語

彙検索の行動の詳細について、どのような目的でどのように言葉を検索したのかを語彙検索行動情報シート (以下：記録シート) に記入してもらった。

今回は、記録シートで学生が申告した「調べたい言葉」 (対象語数 3,307 語) を語種の観点から、学習者の母語別 (中国語、韓国語、ベトナム語、英語、ドイツ語)、日本語レベル別の傾向について定量的に分析する。また、学生から提供を受けた録画データを検証し、検索時の学習者の困難点を定性的に分析する。

3. 「調べたい言葉」の傾向

まず、学習者の母語別の「調べたい言葉」の語種割合 (表 1) を見ると、漢語の割合は、ベトナム語話者、ドイツ語話者、和語の割合は、韓国語話者、英語話者の順で高かった。特に漢語では、中国語話者が 38%であったのにたいし、ベトナム語話者は 64%であった。また、外来語では、中国語話者の検索割合が 13%であったのにたいし、英語話者はわずか 1%であった。検索数からは、中国語話者は漢字や漢字熟語の知識の面で、また英語話者は外来語の

表 1 母語別の「調べたい言葉」語種割合

母語	和	漢	外	混	固	計
中国語	39%	38%	13%	7%	3%	100%
韓国語	55%	36%	3%	5%	1%	100%
ベトナム語	26%	64%	5%	4%	1%	100%
英語	54%	38%	1%	6%	1%	100%
ドイツ語	36%	58%	3%	3%	0%	100%

知識の面で有利にあることが推察される。

※1 国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員

※2 国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員

※3 国立国語研究所 教授

次に、学習者の日本語レベル別に検索割合を集計した。漢語と和語に注目すると、中国語話者や韓国語話者では日本語のレベルが高くなると、漢語の割合が相対的に高くなる一方、和語の割合が低くなる。同様に日本語のレベルが高くなると、外来語の検索では中国語話者やベトナム語話者の、混種語の検索では中国語話者や韓国語話者の割合が、それぞれ高くなる結果となった。より詳細な分析には調査時期の授業や課題内容の影響も考慮しなければならないが、日本語レベルが高くなると未知の漢語や外来語、構造が複雑な混種語に出会う機会が増え、検索数が増えるためと推察される。

4. 漢語を調べる際の難しさ

検索割合が高い漢語に着目すると、学習者の母語に応じて、辞書使用の困難点も変わることが録画データから確認できる。

漢字圏の背景をもつ中国語話者は、漢語の読み方を正しく入力できず、検索に手間がかかることが多い。例えば、中国語話者が「賀正（がしょう）」を検索する際、「かしょう」と入力し、「が」を「か」と誤って入力してしまった際、検索候補として「嘉賞」「過小」「華商」「仮象」などの複数の同音異義語が表示されたため、学習者は、キーボード入力を断念し、漢字を手書きで入力していた。一方、ベトナム語話者、ドイツ語話者、英語話者は、漢字の誤った書き順や、字形の微妙なズレなど、漢字の手書き入力が困難点となることが多い。例えば、ドイツ語話者が「選手」の「選」を手書きで入力する際、旁（巽）を書き終える前に偏（しんにょう）を書いてしまったために（図1）、検索候補の一覧に「選」が表示されず、再度、別のアプリを用いて入力、検索し直すという事例も見られた。

5. おわりに

学習者が調べている語は、母語や日本語レベルに応じて、語種の観点から一定の傾向が見られることがわかる。ただし、実際の辞書使用の困難点については、母語知識や日本語レベルのみならず、学習環



図1 「選」入力画面

境や学習者自身の IT リテラシー、そして使用する辞書リソース等の大きな影響も受けている。今後もこうした基礎研究を積み重ねながら、辞書ツールやテキスト生成 AI などの効果的な利用方法を検討し、教育現場への応用につなげたい。

(a.sano@ninjal.ac.jp)

付記

本研究は、科研費（JPK21K18375）および国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「学習者の辞書資源使用の実態調査」の研究成果の一部である。

参考文献

- 1) 石黒圭・佐野彩子・吉甜：世界の日本語学習者の辞書ツール使用事情—スマホによる語彙検索行動の適切な支援のために—, 社会言語科学, Vol.26, No.1, pp.5-20 (2023)
- 2) 鈴木智美・清水由貴子・中村彰・渋谷博子：海外の大学における日本語学習者のツール使用状況の解明—ICT 時代における教師の教育設計リテラシーの向上を目指して—2017 年度実施のアンケート調査の結果と分析—, 日本語・日本学研究, Vol.10, pp.23-48, (2020)
- 3) 野田尚史・村田祐美子・中島晶子・白石実：ヨーロッパの日本語学習者の読解における辞書使用の問題点とその指導, ヨーロッパ日本語教育, Vol.24, pp.185-202, (2020)

人文系論文における係助詞「は」の直後に 読点が打たれる要因について

Comma Placement Immediately After the Binding Particle "Ha": Determinants for Humanities Papers

○岩崎 拓也^{※1} ○井伊 菜穂子^{※2}
IWASAKI, Takuya II, Nahoko

キーワード：句読点、読点、一般化線形モデル、アカデミックライティング、段落
Keywords: punctuation, comma, generalized linear model, academic writing, paragraph

1. はじめに

日本語教育における作文の授業や初年次教育におけるアカデミックライティングの授業では、句読点の打ち方の指導がなされることがある。しかし、教員の主観的な判断による場合も多く、根拠が示されることは少ない。学術論文を対象にした研究もあるが（村岡ほか 2004¹⁾、佐藤ほか 2013 など²⁾）、句読点の使用実態には焦点が当てられていないのが現状である。

本発表では、留学生数の多い人文系の査読付き論文における係助詞「は」（以下「は」）直後の読点の特徴を分析・考察する。これにより、人文系論文における読点の打ち方の一端を明らかにすることを目的とする。「は」直後の読点に着目したのは、読点を打つか否か迷いやすい位置であることと、文構造の理解に影響する重要な箇所であるためである。

2. 方法

分析対象は人文系論文 60 本である。内訳は、日本語学（『日本語の研究』）20 本、日本語教育学（『日本語教育』）20 本、日本文学（『日本文学』『日本近代文学』各 10 本）20 本である（括弧内は対象の学会誌）。分野と学会誌の選定は佐藤ほか（2013）²⁾を参考にした。論文は、各学会誌について 2017 年 12 月からさかのぼって 50 本の論文の中から無作為抽出法で選定した。なお、対象の論文は全て異なる筆者による執筆である。

^{※1} 筑波大学人文社会系助教

^{※2} 国立国語研究所研究系プロジェクト非常勤研究員

分析の手順は、まず Google Colaboratory を用いて形態素解析（mecab ver0.996, unidic-cwj-202302）を行い、R（version 4.3.2）を用いてデータを整形した後、n-gram を作成した。次に、「は」直後の読点の有無、文長、形式段落（以下、段落）内の位置などの特徴を計算し、一般化線形モデルを作成、クロスバリデーション^{註1)}によるモデル評価を行った。そして、「は」の直後に読点が打たれる要因を分析、考察した。なお、テン「、」とコンマ「,」はまとめて読点として扱う。

3. 結果および考察

まず、「は」直後の読点の出現傾向を概観する。「は」直後の読点については、読点ありが 3,604 例（36.5%）、読点なしが 6,262 例（63.5%）であった。読点ありは 3 割超にとどまり、多く打たれてはいなかった。次に、一文中の読点の数については、読点ありが平均 3.2 個、読点なしが平均 2.5 個であり、いずれも平均約 3 個であった。さらに、文長との関係を見ると、読点ありが平均 83.1 文字（「は」直後の読点を含む）、読点なしが平均 80.4 文字であり、読点ありの文のほうが平均 3 文字程度長いことがわかった。表 1 は「は」直後の読点の有無と段落内の位置をまとめたものである。

表 1 「は」直後の読点の有無と段落内の位置

	冒頭	内部	末尾	計
読点あり	1,246	1,590	768	3,604
読点なし	1,776	3,043	1,443	6,262
計	3,022	4,633	2,211	9,866

段落内部と末尾では読点ありと読点なしの比率がほぼ1:2である一方、冒頭では約2:3であり、読点ありの割合がやや高いことがわかる。最後に、論文ごとに見ていくと、「は」直後に読点を打つ割合が50%以上だった論文は60本中12本(20%)であり、中には7割以上に読点を打つ論文もある一方で、1割しか読点を打たない論文もあり、幅が見られた。

次に、モデリングの結果を示す。読点の有無を応答変数に、各論文(書き手)、文長、一文の読点数、段落内の位置を説明変数とした上で、一般化線形モデルを全ての組み合わせで作成(15パターン)、モデル評価を行った。AICを比較したところ、最も低いモデルは全ての変数を扱う【読点の有無～論文+一文の読点数+一文の長さ+段落内の位置】、次点は【読点の有無～論文+一文の読点数+一文の長さ】であった。

分析結果から、論文ごとに読点の打たれやすさが異なることが確認された。これは、書き手の個性の存在を示す結果であり、従来の研究(金1994³⁾などと重なる結果である。また、一文中の読点数が多いほど「は」直後に読点が打たれにくい一方で、一文が長いほど「は」直後に読点が打たれやすいという結果になった。さらに、段落内の位置については、段落の冒頭にあることが「は」直後の読点の有無を決める強い要因であるという結果が示された。一文が長くなると「は」直後に読点が打たれやすくなるのは、係り受けの関係を示すためだと考えられる。また、段落の冒頭で読点が打たれやすいのは、段落における「は」のピリオド越えと、岩崎(2023)⁴⁾で示されているような遠くの係り先のマーカーとしての機能によるものだと考えられる。以上から、一文の長さだけでなく段落を意識した読点の指導も必要であることがわかった。

最後に、「は」直前の形態素(語彙素)を抽出し、合計頻度が10以上の形態素を対象に「は」直後の読点の有無との関係を分析した。その結果、「助詞+『は』」の組み合わせの中で直後に読点が打たれる割合が50%を超えるものは、「べし+は」73.3%、「の+は」63.0%、「から+は」52.0%、「て+は」51.0%であり、50%以下の組み合わせは、「で+は」42.7%、「に+は」39.4%、「まで+は」28.6%、「か+は」28.1%、「など+は」26.7%、「と+は」23.4%であった。「べし+は」(例

「注目すべきは」)のように論の中でも重要な主張や特筆すべき点を主題に挙げる場合は「は」直後に読点が打たれやすく、用語の定義や引用で用いられる「とは」、問題提起で用いられる「かは」などのように論の中で前提となる点を主題に挙げる場合は「は」直後に読点が打たれにくいのではないかと考えられる。「助詞+『は』」以外の組み合わせも見てみると、「データ」「結果」「目的」「本稿」など論文特有の名詞+「は」直後に読点が打たれる場合が多い(50%を超える)ことがわかった。

4. おわりに

以上、本発表では、人文系論文を対象に、「は」直後における読点の有無の特徴の一端を明らかにした。今後は、学术论文の分野による差や、文末表現との関係などについても検討を進めていきたい。

(iwasaki.takuya.gp@u.tsukuba.ac.jp)

(iinahoko@ninjal.ac.jp)

謝辞

本発表は、国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」の研究成果である。

注

注1 データをK個に分割し、内1個をテストデータ、残りのK-1個を学習データとして正解率を評価する方法。

参考文献

- 1) 村岡貴子, 米田由喜代, 大谷晋也, 後藤一章, 深尾百合子, 因京子: 農学・工学系日本語論文の「緒言」における接続表現と論理展開, 専門日本語教育研究 6, pp.41-48 (2004)
- 2) 佐藤勢紀子, 大島弥生, 二通信子, 山本富美子, 因京子, 山路奈保子: 学术论文の構造型とその分布—人文科学・社会科学・工学 270 論文を対象に—, 日本語教育 154, pp.85-99 (2013)
- 3) 金明哲: 読点の打ち方と文章の分類, 計量国語学 19-7, pp.317-330 (1994)
- 4) 岩崎拓也: 現代日本語における句読点の研究: 研究概観と使用傾向の定量的分析, ココ出版 (2023)

小説の読みに見られる登場人物の内面の推測の特徴

— 中国語話者と日本語母語話者との比較 —

How Do Japanese Learners Infer the Feelings of Characters from the Opening Lines of Literary Fiction ?

伊藤 拓人^{※1}

ITO, Takuto

キーワード：読解、文学教育、学習言語の推論、上級学習者

Keywords: Reading Comprehension, Literature Education, Inference in L2, Advanced Learners

1. はじめに (背景および目的)

小説の読みでは、物語内容の把握、積極的な解釈、漠たる印象の感受等が並行的に行われる。このような「読み」について、現代小説冒頭を用いる伊藤 (2022) の方法で、日本語学習者を対象に調査した。

研究課題：日本語学習者の現代小説冒頭における登場人物の心情の読み、どのような要因が作用しているか。

2. 方法

分析対象：中国語を母語とする中級後半から上級の日本語学習者 24 名 (cs)、日本語母語話者 16 名 (js)。共に 20～32 歳の大学生または大学院生。

テキスト：2 つの短編小説の、それぞれ 2 人の人物が登場する冒頭を用いた。

野呂邦暢「水晶」

女は彼の腕につかまって歩いた。／「タクシーをとめよう」／「大丈夫よ、歩けるわ」／歩いてみたい、と女は付け加えた。冷房のきいた病院から午後の街へ出て数分あまり、彼の肌は汗ばみ始めた。

よしもとばなな「幽霊の家」

「だったら鍋が食べたいけど、ひとりで家で食べてもつまらないから、せっちゃん、一緒に食べない？」／私は、単に「バイトの時いろいろかばってもらったから、お礼にバイト料で何かごちそうするよ。」と言っただけだった。／そして岩倉くんから返ってきた返事はそれだったのだ。

手順：①母語への翻訳 (cs のみ)。②物語内容についてインタビュー。登場人物の数と内訳、人物の属

^{※1} 一橋大学言語社会研究科博士後期課程、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター常勤講師

性、心情、性格、人間関係、場面 (時間・場所) 等、さらに各回答の根拠、他に気が付いた事を聞き、迷いや判断の変更が見られた場合はその理由も聞いた。分析：読みの内容を分類し、cs と js の間の不一致、cs 間のばらつきの要因を発話例から探った。

3. 結果と考察

3-1 「水晶」冒頭での人物の内面の読み

・【彼：女を心配】。cs…24 名中 10 名 (以下 10/24 のように記す) (41.7%)、js…12/16 (75.0%)。発話例…「女が歩けるか心配」(cs1)「女の体が弱いのを心配」(cs27)。終助詞の知識不足等により鍵括弧部分の発話主の同定に躓き (伊藤 2023 に詳述)、医者にかかったのは「彼」と、js と異なる物語把握をした cs が 7 名あり、いずれもこの読みがなかった。

・【女：心配させたくない】。cs…2/24 (8.3%)、js…4/16 (25.0%)。発話例…「自分は弱くないと言いたい」(cs16)、「心配させたくない」(cs11)。この「彼」の心配を和らげようとする「女」の心情を読んだ cs は皆、前記の物語内容を js 同様に把握し、かつ【彼：女を心配】を読んでいた。

・【女：喜び】。cs…3/24 (12.5%)、js…4/16 (25.0%)。発話例…「嬉しい。こういう時間が長くなればいい」(cs21)、「久しぶりに外に出た」のが「嬉しい」(cs18)。この 2 例は【彼：女を心配】を読み、2 人の人物の心情を対照的に捉えている。他、「怪我がよくなったから嬉しい」とした cs25 は加えて「甘えている」とも述べ、「彼」については「嬉しい」「緊張」等と読んだ。cs25 は「冷房」「汗ばみ」等から季節を夏と想定し、日本のアニメや文学の恋愛小説は夏だから」と、ジャンル知識を通して 2 人の恋愛

感情を読んでいた。他に、「病気が重いと思ってない」(cs27)、「楽観している」(cs12)と「女」自身の病状認識を読んだ3名も、【彼：女を心配】を読み、体の状態への認識が対照的に捉えられていた。

・「女」の内面の推測が乏しい例。物語内容をjs同様に捉えながらも【彼：女を心配】の読みがなかった5名のcsを見ると、「女」についてcs24は「興奮している」、cs19は「軽快な気持ち」とだけ述べ、残りの3名は「分からない」と答えた。

まとめると、csによる内面の読みは、語彙知識に依拠する物語内容の把握に左右されていた。一方、その点で躓きがない場合も、読みの有無に個人差があり、2人の登場人物両方について読みが乏しいか両方の心情を読むかに二分される傾向が見られ、その把握が相互に支え合っていることが観察された。また、長期の入院等の背景への想像力や、ジャンル知識の活用が作用している例が見られた。

3-2 「幽霊の家」冒頭での人物の内面の読み

・【岩倉君…私への好意】cs…8/24 (33.3%)、js…11/16 (68.8%)。発話例…「(私と) 親しくなりたい」(cs23)、「恋愛を含んだ好き」(js4)。csのこの読みの少なさの要因として、発話順・発話主についての理解の躓きが挙げられる。例えばjsと異なり2つの会話文を共に「私」の発話と捉え、その記述順が時系列と逆であることも見落とした4名のcsは、岩倉君の心情を「分からない」とした。

・【私：違和感・戸惑い】cs…12/24 (50.0%) js…14/16 (87.5%)。発話例…「そんな返事をしてほしくなかった」(cs18)、「ご飯食べるだけと思ったのに家に行くという話になって、驚いた」(js7)。この読みの根拠として主に文末形式「だったのだ」、時にそれに加えて副詞「単に」、取り立て助詞を含む「だけだった」が挙げられた。その内実を見ると、js7のように家への誘いへの反応だと捉える例がcsに6名、jsに9名見られた。これらの形式に注目しなかったcsは、私は「給料をもらった」から「嬉しい」(cs9)、「ごちそうしなくてもよくなったから、岩倉君は優しいと思った」(cs25)等と読んでいた。

・「だったのだ」から他の含意を読んだ例。「それだったのだ」に注目したcs20は、岩倉君は「特に嬉

しくもない」、私は「岩倉君の返事は冷たいと思った」と読んだ。cs20は上記発話主・発話順をjs同様に捉えたが、「せっちゃん」を「私」ではない第三の人物と見なし、一对一の食事を岩倉君が避けたと捉えていた。cs20はさらに、「鍋」から外食を想定し、調査後の振り返りでも、中国では「特に関係がなくても一緒に食べる」「他の料理でも一緒のお皿から取るから鍋は特別じゃない」と述べ、鍋から関係を深めるような含意を読まなかったことを示した。

他に、私の違和感や戸惑いの理由を「(お金だけ払うつもりが) 一緒に食べようと言ってきた」(cs16)こと、「鍋は高い」(cs3)こととし、必ずしも家での食事を想定していないcsが2名あり、cs20同様【岩倉君…私への好意】を読まなかった。さらにcs15は「家で食べる意味か外で食べる意味か」迷い、家であれば私は「反感がある」とした。このような「鍋」の含意を巡るcs間の揺れは、「私」の心情の読み作用し、また【岩倉君…私への好意】の読みに見られたcsとjsの差にも響いていると思われる。

まとめると、csによる内面の読みには、一人称語りの文末形式・副詞等の知識の運用が作用していた。また、文化的知識を踏まえた内容語の含意の読みはcs間でも個人差があり、好意や戸惑い等の読みを左右していた。

4.まとめと教育への示唆

学習者の小説冒頭における人物の心情の読みは、言語知識の不足によって阻害される場合があった。他方、ジャンル知識の活用、物語の背景への想像、文化的知識の運用によって学習者間でも個人差があった。小説を扱う授業では、言語的な細部へ確実に注意を促すとともに、それを踏まえた個々の学習者の多様な読みを生かした授業運営が望まれる。

(kyzyilkumtkti@gmail.com)

参考文献

- 1) 伊藤拓人：日本語教育における小説の読みの研究方法の提案—学習者が冒頭部分から何を読んでいるかに迫るために、一橋日本語教育研究, Vol.10, pp.39-54 (2022)
- 2) 伊藤拓人：日本語学習者は小説冒頭の会話文の発話主をどのように同定しているか、読書科学, Vol.64, No.2, pp.69-83 (2023)

第26回 専門日本語教育学会研究討論会誌

2024年3月2日発行

© 専門日本語教育学会 2024

専門日本語教育学会事務局

名古屋経済大学国際交流センター

宮島良子研究室

〒484-8504 愛知県犬山市内久保 61-1

TEL: 0568-67-0511

E-mail : office-stje@kir.jp

発行：第26回専門日本語教育学会大会実行委員会

村岡貴子（大阪大学） 会長

野田岳人（群馬大学） 代表幹事

大島弥生（立命館大学） 大会実行委員長

太田亨（金沢大学）

遠山千佳（立命館大学）

新實葉子（立命館大学）

福良直子（大阪大学）

堀一成（大阪大学）

道上史絵（立命館大学）

渡辺史央（京都産業大学）

専門日本語教育学会